

岡山大学構内遺跡調査研究年報15

1997年度

1999年1月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学構内遺跡調査研究年報15 正誤表

以下のとおり訂正ください。

頁	誤	正
12頁30行目	1919年	1907年
12頁30行目	明治44年	明治40年

岡山大学構内遺跡調査研究年報15

1997年度

1999年1月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターは、岡山大学構内における埋蔵文化財の保護を目的として昭和62年（1987年）11月26日に発足しました。平成9年度でちょうど10周年を迎えたわけですが、この間に津島地区の大学院自然科学研究科棟・保健管理センター・図書館、鹿田地区のアイソトープ総合センター等々の建設地で調査を行い、発掘調査は15件におよぶことになりました。このほか小規模な試掘調査や立ち会い調査も多数にのぼりますが、こうした調査の成果は、本センター刊行のセンター報・構内遺跡調査研究年報・発掘調査報告書等において順次本学内外へ広く公表してきたところです。

センターの10年と前身である埋蔵文化財調査室（昭和58年発足）の4年間を経るなかで、津島地区には縄文時代の生活跡や弥生時代以降の水田跡などがほぼ全域に拡がることが分かり、鹿田地区では特に弥生時代・古墳時代・中世における集落跡が濃密に分布することが明らかになりました。また平成9年度には、本年報で概略を報告しておりますように、鳥取県三朝地区構内でも縄文時代から中世にわたる遺跡のあることが判明しました。本センターの守備範囲がさらに拡大することとなったわけですが、また、これら発掘調査のなかで土器・石器・木器・金属器などの遺物が大量に出土しております。

このようにセンター事業を円滑に進め、調査成果を着実に蓄積することができましたことは、ひとえに関係の調査機関・研究者や本学の事務局・関係部局あるいは岡山県教育委員会・岡山市教育委員会等の諸機関・各位のご指導とご協力の賜であります。10周年の年報刊行の機会にあたり、あらためてお礼を申し上げる次第です。

本学における埋蔵文化財の保護と調査の事業はこれからも永く続く見込みであり、出土する貴重な文化財を後世にのこし、調査成果を積極的に活用してその意義を広く社会に伝えていくことがこれからの大変な課題となります。文部省ではいま大学博物館の設置を推進しておりますが、本学の各学部・関係機関における多様な研究成果とともに、本センターの調査成果もそうした場で積極的に活用されることが期待されるところです。また、構内遺跡の一部を緑地として保存整備し、教職員や学生が日常的に文化財に親しむことができるような工夫も必要かと思われます。

ともあれ本センターの課題は山積しており、機構や施設を一層充実させるよう努めたいと思いますので、今後とも関係各位の一層のご理解とご支援をお願いいたします。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長

稻 田 孝 司

例　　言

- 1 本報告は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが岡山大学構内において1997年4月1日から1998年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査と保存、および活動成果をまとめたものである。
- 2 大学構内の埋蔵文化財の調査に際しては、設定基準を次のように定めた。
 - 1) 津島地区では、国上座標第V座標系(X=-144,500m, Y=-37,000m)を起点とし、真北を基軸とした構内座標を設定した。一辺50mの方形区画である。また、同地区では調査の便宜上、大きく津島北地区と同南地区に二分する(図15)。
 - 2) 鹿田地区では、国上座標第V座標系(X=-149,800m, Y=-37,400m)を起点とし、座標軸をN15°Eに振ったものを基軸とした構内座標を設定した。地区割は一辺5mの方形を用いている(図17)。
 - 3) 本文中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は真北を、他は磁北を用いている。
- 3 岡山大学構内の遺跡の名称は、周知の遺跡の場合はそのまま踏襲する。津島地区構内については、全域を「津島岡大遺跡」と総称する。三朝地区の発掘調査地点は小字名をとり「福呂遺跡」と呼称する。他地区は任意の名称で仮称する。
- 4 調査名称は、「発掘調査」に分類したものについては、各遺跡毎に調査順に従って次数番号で呼称し、「試掘調査」「立会調査」に分類したものは、任意の名称を用いる。発掘調査のうち、小規模で、試掘調査から連続して調査したものは、「試掘調査」に分類する。
- 5 「発掘調査」についての記述は現段階における概要であり、詳細は正式報告に依って頂きたい。「試掘調査」については、本年報での記述を正式報告にかえる。
- 6 表に記載した所属部は、原則として各学部の頭文字を略号として用いている。
- 7 本文・目次・挿図・写真などで使用の調査番号は表1と一致する。
- 8 本文は小林青樹、野崎貴博、山本悦世が分担執筆し、執筆者名を末尾に記した。
- 9 編集は稻田孝司センター長の指導のもとに、野崎貴博が担当した。
- 10 本年報に掲載の津島地区の地形図は国土地理院発行の1/25000「岡山北部」を複写したものである。
- 11 調査・整理において西川宏、扇崎由の両氏にご援助・教示を頂いた。記して感謝申し上げる。

岡山大学構内遺跡調査研究年報15 1997年度

目 次

第1章 1997年度岡山大学構内遺跡調査報告

第1節 調査の概要	1
第2節 発掘調査	1
1 福呂遺跡第1・2次調査〈固体地球研究センター実験研究棟新営予定地〉	1
2 鹿田遺跡第7次調査〈医学部基礎医学棟新営予定地〉	6
第3節 試掘調査	8
1 固体地球研究センター実験研究棟新営工事に伴う試掘調査	8
2 医学部校舎新営工事に伴う試掘調査	10
第4節 立会調査	11
(1) 津島地区	11
(2) 鹿田地区	12
(3) 三朝地区	12
(4) 東山地区	12
第5節 岡山大学構内における陸軍関連施設の調査	12
第2章 1997年度普及・研究・資料整理活動	21
1 資料整理	21
2 分析依頼	21
3 刊行物	21
4 調査員の活動	21
5 日誌抄	23
6 1997年度までの遺物保管状況	24
7 遺物の保存処理	24
8 10周年記念事業	27
9 資料の貸し出し	27
第3章 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項	28
第1節 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程	28
1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程	28

2	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規程	29
3	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程	30
4	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会規程	31
第2節	1997年度埋蔵文化財調査研究センター組織	32
1	センター組織一覧	32
2	管理委員会	32
3	運営委員会	33
第4章	1997年度活動のまとめ	34
附表		35
別編		50

挿 図 目 次

図1	福井遺跡の位置	1
図2	福井遺跡第1・2次調査地点の位置	2
図3	上層断面模式図と断面の位置	3
図4	A地点縄文時代早期遺構平面図	4
図5	C地点中世遺構（黒色層2）平面図	5
図6	調査地点	6
図7	鹿田遺跡第7次調査遺構全体図・上層断面図	7
図8	福井遺跡試掘調査 調査地点位置図	8
図9	福井遺跡試掘調査十層断面図	9
図10	試掘調査地点	10
図11	上層断面図	11
図12	調査専土層断面図 岡山市教育委員会	12
図13	庭園測量図	13
図14	津島地区構内にのこる旧陸軍関連施設の位置	15
図15	津島地区全体図	17
図16	今年度の調査【1】津島地区	18
図17	今年度の調査【2】鹿田地区	19
図18	今年度の調査【3】三朝地区	20
図19	今年度の調査【4】東山地区	20

図20 遺跡見学会のコース	27
図21 1997年度までの調査地点【1】津島地区	48
図22 1997年度までの調査地点【2】鹿田地区	49

表 目 次

表1 1997年度調査一覧	16
表2 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要	25
附表1 1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）	35
附表2 1996年度以前の構内主要調査（1983～1996年度）	36
附表2-（1）発掘調査	36
附表2-（2）試掘調査	38
附表2-（3）立会調査	40
附表3 埋蔵文化財調査室刊行物	46
附表4 埋蔵文化財調査研究センター刊行物	46

資 料 目 次

資料1 『和名抄』国郡之部	52
資料2 『続日本紀』和銅6年	53
資料3 平城宮木簡	55

第1章 1997年度岡山大学構内遺跡調査報告

第1節 調査の概要

当センターにおいては大学構内における掘削を伴う工事に際し、事務局施設部企画課を通じて事務手続きを行ったうえで、発掘調査・試掘調査・立会調査にわけて調査を実施している。

これまでのところ、その調査の対象は津島地区と鹿田地区とが中心になっている。特に鹿田地区は周知の遺跡（鹿田遺跡）として、掘削を伴う工事に際し、届出を提出した上で対応を行っている。また、津島地区においても、新たな遺跡の確認が進んでいることから、遺跡名称を「津島岡大遺跡」と総称し、届出の有無にかかわらず、少なくとも立会調査を実施している。今年度は三朝地区で新たに遺跡を発見するに至り、発掘調査を実施した。遺跡の名称は小字名をとって「福呂遺跡」としている。

1997年度は、発掘調査3件、試掘調査2件（三朝地区、鹿田地区）、立会調査31件（津島地区17件、鹿田地区3件、三朝地区10件、東山地区1件）を実施した。そのうち発掘調査・試掘調査については本章でその概要を述べ、立会調査の詳細については表1（p.16～17）に記す。

第2節 発掘調査

1 福呂遺跡第1・2次調査（固体地球研究センター実験研究棟新営工事に伴う発掘調査 三朝）

岡山大学三朝地区は鳥取県東伯郡三朝町大字山田に所在する（図1）。三朝地区は三朝町を流れる三徳川の北岸に位置しており、河岸段丘上に医学部付属病院三朝分院や、固体地球研究センター研究棟などの主要な施設が建設され、北側の丘陵上にはリハビリ用敷策路が設けられている。今回実験研究棟が新営される地点は、この河岸段丘と北側の丘陵の傾斜変換点付近から丘陵裾部にあたり、実験研究棟新営予定地の南側には附属病院三朝分院がある。

a. 調査に至る経過

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターでは三朝地区において、1989年5月に分布調査を行い、施設内及び周辺区域での埋蔵文化財の有無を確認する作業を行った（註1）。分布調査は地表面の観察のみであったため、遺跡を確認することはできなかった。また、敷地内は造成のた

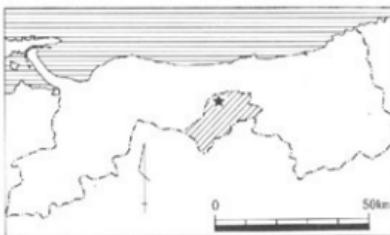


図1 福呂遺跡の位置（星印の地点）

めの盛土等による変化が著しく、地表面での遺跡の確認は困難な状況であった。

1997年度になって、固体地球研究センターにおいて新営実験研究施設の建築計画が具体化した。1997年5月に新営予定地において本体建設工事箇所における根伐工事に立ち会ったところ、弥生土器片を採集するに至り、遺跡の存在する可能性が明らかとなった。また、壁面観察から遺物包含層を数面確認し、また遺構等も良好に残存していることが明らかとなつたため、遺跡が存在することを確認した。すでに、本体工事部分については、西側の約半分が掘削されていたが、関係機関と協議した結果、残存する部分について発掘調査を行うことになった。また、本体工事以外に施設周辺においても付随する工事があり、渡り廊下の基礎及びスロープ部分について発掘調査を行った。

なお、調査にあたっては鳥取県教育委員会、三朝町教育委員会に支援を頂いている。

b. 調査の経過

調査は遺跡を確認した翌日の1997年5月10日から5月20日の期間で実験研究棟部分（A地点）の調査を行い、その後は工事の工程に合わせて付帯工事部分の発掘調査を行った（図2）。1997年7月28～31日には既設の研究棟と新営の研究棟を結ぶ渡り廊下基礎部分（B地点）について発掘調査を行った。手続きの関係上、以上の2期の発掘調査を合わせて第1次調査としている。また、1997年11月26日から12月5日まで新営研究棟本体南側のスロープ設置部分（C地点）について発掘調査を行った。この期間の発掘調査を第2次調査としている。調査は第1次、第2次ともそれぞれ調査員2名が担当した。調査面積は第1次調査の実験研究棟部分が244m²、第2次調査が120m²である。

c. 調査の成果

（1）地形と層序

遺跡は三朝町を流れる三徳川の北岸に位置している。遺跡は北から南に山稜がせり出して形成される舌状台地の裾部に立地する。調査地点は南側を水路に切られており、小段丘状の高まりとなっている。北側の山稜には調査地点の北東でやや深い谷がある。この谷から流入する砂土による地形の変化は著しい。現地表の標高は、台地上部の本体工事部分で標高約52m、南側



図2 福田遺跡第1・2次調査地点の位置

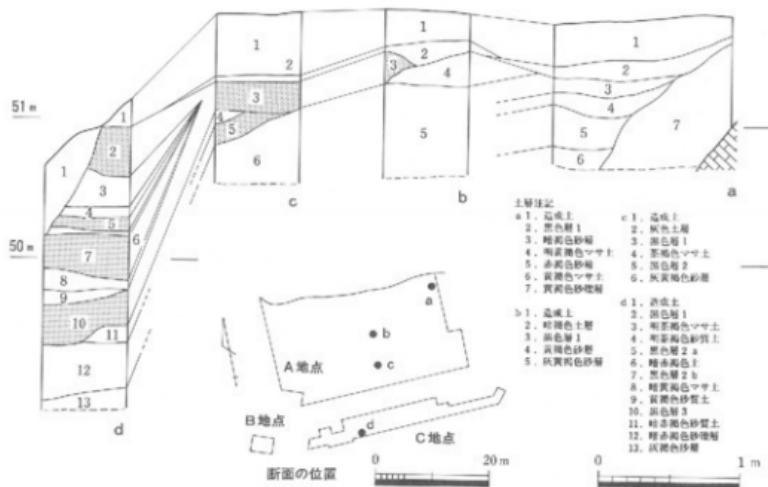


図3 土層断面模式図と断面の位置

の斜面下で標高約50mである。

層序は、斜面堆積や度重なる山砂等の流入土の影響のため、地点により変化が激しい。そのため、以下で示す各地点間における堆積状況は異なっており、層名が同じ場合でも各地点間で対応していない。ここでは基本的な層序について解説する。

A地点南側（図3-c） 第1層は暗褐色土の造成土である。ブロックや炭などを含む近代の層である。第2層は上位の黒色層（以下、「黒色層1」と略称）であり、中世の遺物を包含する。第3層は明黄褐色マサ土層である。しまりがなく、崩れやすい。谷からの流入土と考えられる。第4層は下位の黒色層（以下、「黒色層2」と略称）であり、弥生時代の遺物を包含している。この第4層の下位においては、北側で縄文時代早期末の遺物を包含する黄褐色マサ土層が確認されているが、斜面側ではこの層は収束している。第5層は、暗褐色の小砂礫層が堆積しており、遺物等を包含していない。

C地点（図3-d） 第1層は暗褐色土の造成土である。ブロックや炭などを含む近代の層である。第2層は黒色層1と呼称する層であり、中・近世の遺物を包含する。第3層は明黄褐色マサ土層である。しまりがなく、崩れやすい。谷からの流入土と考えられる。第4層は黒色層2と呼称する層であり、中世の遺物を包含している。南西側ではこの下に第5層の赤褐色土

の硬化した面が見られる。この下には第6層の黒色層2b, 第7層の黒色層2cと呼称する層が堆積し、中世から古代末の時期の遺物が出土している。南西側の深い部分では、さらに第8層の黒色層3がみられ、宋銭が出土していることから古代以降の時期に堆積したことがわかる。この層の下部には遺物等を包含していない砂礫層が堆積している。

(2) 遺構・遺物

縄文時代早期末の時期の遺構は、A地点で小型の地床炉1基と埋設土器1基を検出した(図4)。地床炉は直径が約50cmと小さいものの、周囲からは多量の土器片がつぶれた状態で出土し、黒曜石の剝片や磨り石片も出土している。埋設土器は、ほぼ完形の深鉢を直立させており、中にサヌカイト製のスクレイバー1点を納めていた。上器は、条旗文地に体部中位より上に縄文を施し、口縁部下に竹管状工具による押圧をもつ突唇をめぐらしている。山陰地域の菱根式系の土器であろう。

弥生時代中期の遺構・遺物は、人形の土坑1基、中・小形の土坑・ピット8基を検出した。人形土坑は、直徑が1mを越え、深さも現存で約1m以上ある。中には礫が入り、それに混じって壺や甕などの人形の土器片や石錆等を検出した。時期は弥生時代中期末に相当する。

中世以降の遺構・遺物は、A地点では土坑とピットの他に、縦溝を2基検出した。須恵質系陶器片や上師質土器が多く出土している。

C地点では古代以降の遺構と遺物を検出した(図5)。弥生・縄文の包含層は確認されなかった。黒色層3では古代末から中世の小型の土坑やピットを数基検出した。これらのピット内からは須恵器や土師器の破片が出土した。その他、土坑内から、銅錢「太平通寶」が1点出土している。黒色層2では、土坑やピットが群集していた。土坑の中には、石錆、上師質土器の鍋や、須恵器の破片、また完形の土師質土器の小皿を埋納しており、埋葬に関係する可能性

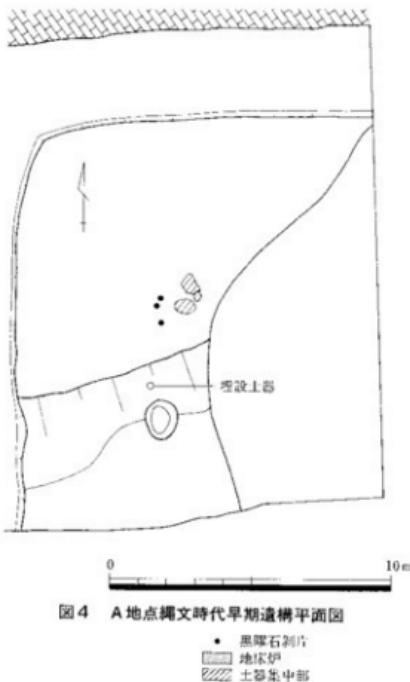


図4 A地点縄文時代早期遺構平面図

- 黒曜石剝片
- 地床炉
- ▨ 土器集中部

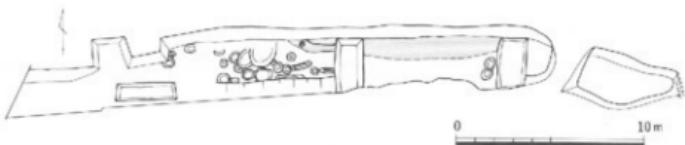


図5 C地点中世造構(黒色層2)平面図

がある。

C地点では黒色層1で、近世のピット等を数基検出した。

その他、包含層からは突帯文土器片、弥生時代前期の壺と甕片、古墳時代前期の土師器甕片、古墳時代の須恵器、中世の青磁片等、各時代・時期の遺物が出土している。

d. まとめ

三朝町ではこれまで数回の発掘調査が行われ、縄文時代中期、弥生時代中期、古墳時代中期の遺跡の存在が明らかにされており、また、分布調査によって弥生時代以降中世までの散布地と古墳時代後期の古墳群が存在することが知られている。しかし、岡山大学三朝地区が所在する山田周辺では古墳時代後期の山田1号墳の存在が知られるのみであった。

今回の2次にわたる調査では、縄文時代早期から近世にいたるまでの遺構を検出し、また多くの遺物の出土も確認した。特に縄文時代早期に遡る遺構はこれまで町内で確認されたものでは最も古く遡る人間活動の痕跡であり、また出土した土器には九州の轟式の影響がみられ、九州や鳥取県西部の遺跡との関係を考えることが可能となる資料であることは重要である。弥生時代では中期後半の遺構とそれに伴う遺物を検出したが、包含層からはこの地域でこれまで知られていない前期の土器も出土している。中世では土器や石を埋納した墓地と考えられる土坑群を検出した。この土坑の中から出土した石鍋の存在は三徳川流域の中世史を考えるうえで重要なである。石鍋は長崎県を中心に瀬戸内沿岸や畿内、鎌倉に分布がみられ、日本海沿岸地域では出土例が極めて少ない。今回出土した石鍋は三仏寺の寺伝に源頼朝が三徳山に寺領3000石を与えたとの記事にあるように、鎌倉幕府との関係の中で搬入されたものと考えられよう。頼朝が与えた寺領がどの地域であったのかは不明であるが、今回の調査成果から三徳川流域がその候補となる可能性が高くなったと考えられる。

今回の調査は三朝町の地域史を考えるうえで重要な資料を提供したといえるが、今後は列島内でこの地域の位置づけを行うことが必要となるであろう。なお、本調査の資料は現在調査途上にあり、本報告の内容は暫定的なものである。

(野崎貴博)

註

- (1) 「岡山大学構内遺跡調査研究年報」7 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1990年

2 鹿田遺跡第7次調査（医学部校舎新設工事に伴う発掘調査 鹿田BR55～BX61・BY56～57区）

a. 調査に至る経緯

老朽化の進む医学部基礎医学棟の新営が、既存施設の南側に広がる駐車場に計画され、845m²程度の面積が埋蔵文化財の調査対象範囲となる可能性が提示された。それを受け、12月10日に試掘調査を実施した（詳細は第1章第3節参照）。

同調査の結果からは、予定地周辺の調査データ（南側の動物実験棟、西側の鹿田遺跡6次調査に当たるアイソトープ総合センター）も参考にした上で、比較的遺構密度の高い中世包含層とやや希薄な状態を示す弥生～古墳時代の包含層の存在が想定された。

最終的に調査面積は829m²となり、調査員2名が、発掘調査期間約5ヶ月の予定で担当することとなった。

b. 調査の経過

1998年2月16日から造成土の除去を開始したが、作業が進むにつれて、旧建物の基礎が姿を見せ始め、予想外に広い面積を占める堅固なものであることが明らかになってきた。当初、基礎撤去に伴う遺跡破壊を鑑み、大形の基礎部分は残して、調査終了後に対処する方針であったが、同建物に平行して同規模の基礎を有す旧建物の存在が確認された段階で、基礎を残しての調査は極めて困難となる状態に陥った。北側部に関しては、すでに周囲の造成土除去が大方終了していたために機械の導入ができず、撤去は不可能であった。その基礎は、最終的に調査区の北1/3程を占める結果となる。一方、南側の基礎については、極力周囲の破壊を避けるために圧搾機を導入して撤去することとし、

準備のために造成土除去作業は2月23日から一時中断となった。再開は3月9日からで、3月17日に完了した。

本格的な発掘調査の開始は1998年2月26日である。調査区北側の可能な範囲から作業を進めたが、調査区分断に伴う作業の繁雑さや基礎撤去に伴う掃除に多くの時間が割かれ、軌道に乗るのは約1ヶ月後、造成土除去が完了した後の3月後半であった。

その後、近代の面を整え、一部で中世層上面への下げを行った状態で、3月31

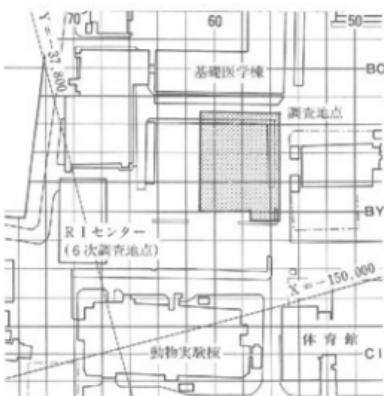


図6 地質地図(縮尺1/2,000)

日に97年度の調査を終了した。

c. 調査の概要

(1) 層序(図7)

現在の地表から深さ約1mまでは、医学校敷地造成時(大正11年3月)の盛り土である(1層)。その直下の2層は淡灰色と暗灰色の粘土や灰色砂等が、ブロック状あるいはラミナ状に堆積する。同層は調査区全域を覆うように広範囲に厚く認められ、大規模な洪水に関連した土層の可能性が強い。3層は淡灰色の水田土層で一部分では二つに細分できる。時期は出土遺物から近代の範囲を考えている。4層は緑灰色の練った土層で、中世(鎌倉~室町時代)の包含層をなし、本来その間にあるはずの近世土層は削平されているようである。同層は二層に細分される。上層に当たる4a層は淡緑灰色砂質土、下層に当たる4b層は暗緑灰色土を呈す。いずれも炭化物や遺物を多く含む土層で、当時の集落の存在を強く示す。古代層は確認できなかつた。5層は褐色を強めた砂質土で古墳時代初め頃の包含層である。6層は黄褐色土で基盤層をなす。

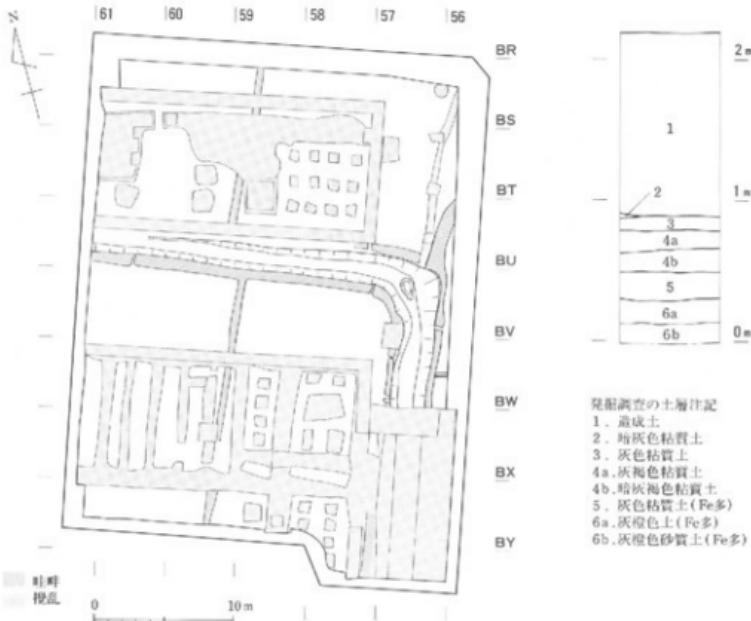


図7 鹿田遺跡第7次調査遺構全体図・土層断面図(縮尺1/400・1/40)

(2) 調査の概要(図7)

1997年度内では、面的な調査成果としては、造成土除去面に当たる近代の面(3層)で検出した耕作関連遺構の調査が中心である。それ以外では、一部において近世土坑の調査、あるいは中世層(4層)上面におけるピット群の調査に入った。主要な調査は4月以降である。

3層では、調査区中央部をL字形に走る溝とそれにとりつく水田畦畔が遺存していた。方向は、鹿田キャンパスの敷地の軸に沿っている。溝は幅2~3m、深さ1mの規模で、両縁には幅50cm程度、高さ5cmのしっかりした畦が附属する。水田畦畔は幅約30cmで、高さは約5cmが確認された。それぞれの水田は水口を溝側に有している。

時期的には新しいものであったが、鹿田遺跡の調査で耕作関連遺構の確認は初めてであり、集落と生産域の関係を窺って考える上でも貴重な資料となった。

4月以降は、調査は数基の近世土坑に続き、大規模な溝や多数の柱穴そして井戸などで構成された中世の遺構群に移り、最終的には古墳時代初頭に属する堅穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑・溝などの調査を終え、8月6日にすべての作業を終了した。4~8月の詳細については次回の年報で報告する。

(山本悦世)

第3節 試掘調査

本年度は鹿田地区において1件、三朝地区において3件の試掘調査を実施した。鹿田地区では、基礎医学棟新営予定地の調査、三朝地区では実験研究棟新営予定地関連の調査を行った。以下に概要を記す。

1 固体地球研究センター実験研究棟新営工事に伴う試掘調査

a. 調査の経過

1997年5月に、固体地球研究センターの新営実験研究施設予定地において、本体建設工事箇所における根伐工事の際に、遺跡の存在が明らかになつた。そして、遺構等が良好に残存していることが判明したため、関係機関との協議の結果、残存する部分について発掘調査を行うことになった(第1章第2節)。また、本体工事以外にも施設周辺において付属する工事があり、特に渡り廊下の基礎及びスロープ部分等について発掘調査を行うことになった。

この渡り廊下の基礎及びスロープ部分について、包含層の状況等の情報を得るために試掘調査をおこなった。

また、工事に伴う電気ハンドホール埋設管に関する試

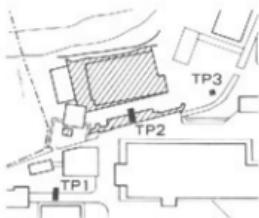


図8 福呂遺跡試掘調査 調査地点位置図
(縮尺1/3,000)

掘調査も行った(図8)。調査については渡り廊下の基礎部分を7月3日、スロープ部分は7月29日、電気ハンドホール関連工事の部分を7月30日にそれぞれ行った。調査員はいずれも1名である。

b. 調査の概要

(1) 渡り廊下の基礎部分(図8, 9・TP1)

渡り廊下の基礎部分の試掘坑は、工事部分の南北軸線上の東側に設定した。規模は3×3mである。現標高は、約49.5mで、ゆるやかに南側に向かって傾斜する。

1・2層は造成土で、合わせて厚さ約70cmである。3層は昭和14年の旧研究所に関連する石

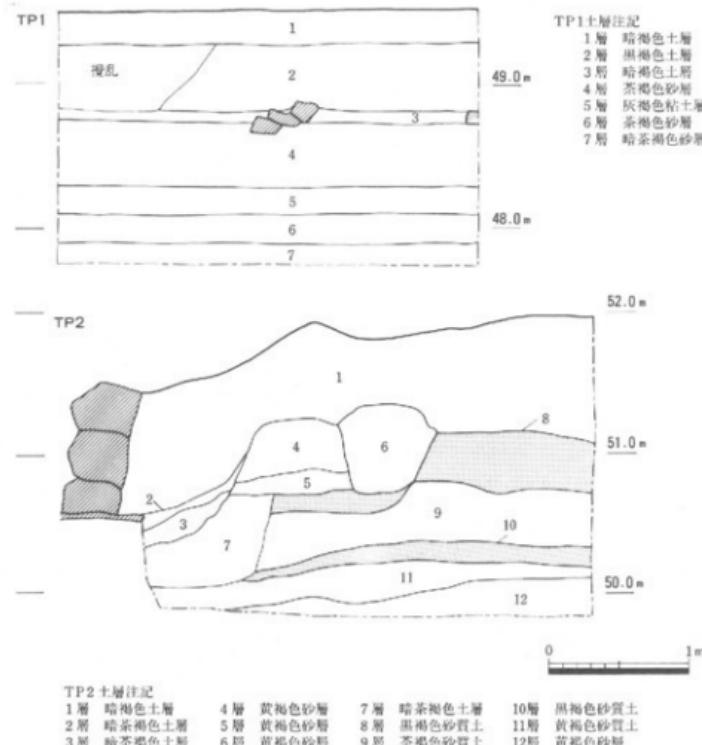


図9 福呂遺跡試掘調査土層断面図

敷きと、その上止めの層であり、厚さ約10cmである。4層は茶褐色砂層である。遺物等がなく時期は不明である。5層は暗茶褐色の粘質土層で、幕末の陶磁器を含む水田層と考えられる。6・7層は黄褐色の砂層であり、遺物等を含まない。マンガン等が縞状にラミナ状堆積を呈している。

(2) スロープ部分(図8、9・TP2)

本調査については、新営実験研究棟本体の南側に設営されるスロープのほぼ中央付近に、軸線を南北に合わせ設定した。南側については、水路の護岸石組みまでを範囲とし、規模は約4m×1.5mである。

1層は造成上であり、2層・3層・7層は石垣の裏込めに相当する。4層から6層は、近代の陶磁器を含む黄褐色砂層である。8層は黒色の砂質土であり、第1次調査の黒色層1に相当する。中近世の遺物を含む。9層は茶褐色の砂質土である。遺物等は含まない。10層は黒色の砂質土であり、1次調査の黒色土第2層に相当する。11層は黄褐色の砂質土層であり、山砂の堆積と思われる。11層以下はラミナ状堆積が顯著である。

(3) 電気ハンドホール関連工事の部分(図8・TP3)

本調査の地点は、本体工事部分の東南側に位置し、地表から約1.5m掘削した。規模は約3×4mである。既設の配管等が縦横に埋設されており、搅乱のみで包含層は残存していないかった。

c.まとめ

三朝地区では、第1次調査の行われた本体工事部分及び周辺の丘陵舌部の高い部分が、遺跡の中心であり、さらに東西に広がっている可能性がある。病院との境に流れる水路を境にこの丘陵はとぎれるが、スロープでの試掘では包含層が傾斜をもちつつ、石垣の下部方向へもぐりこんでいるので、病院北側の平坦な部分についても注意する必要がある。なお、第1研究棟の周辺については、渡り廊下の試掘結果から本来水田か湿地であったことが判明した。

(小林青樹)

2 医学部校舎新営工事に伴う試掘調査

a. 調査に至る経緯

老朽化の進む医学部基礎医学棟(通称)新営計画の中で、約800m²程度の面積が埋蔵文化財の調査対象範囲となる可能性が1997年秋に提示された。建設予定地は現基礎医学棟の南側に広がる駐車場で、動物実験棟の北約30m、鹿田遺

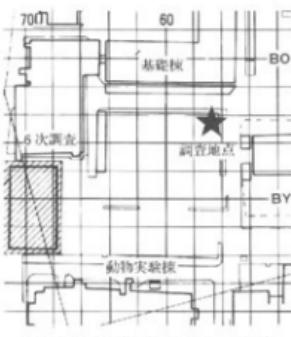


図10 試掘調査地点 (縮尺1/2,000)

跡第6次調査地点の東約35mという位置にある。すでに、雨建物建設の際に中世を中心とした遺跡の存在が確認されており、本地点に少なくとも中世の遺跡が広がることは確実視されていた。

こうした状況から、中世包含層の厚さと弥生時代～古墳時代前半段階の遺構の存在を確認するために試掘調査を行うことになった。西～南側に関しては、前述の調査データを参考にできることから、試掘地点は予定地の北東部隅に1箇所のみとした(図10)。調査は12月10日に調査員1名が実施した。

b. 調査の概要

試掘坑は上面を一辺3mとした。旧建物の基礎に当たったことも影響し、掘り下げるにつれて随時その面積を狭め、最終的には1×1.5mの範囲で断面観察を行い終了した。最下面のレベルは、地表から-2.2mに位置する。その結果、造成土の厚さが1.5mに及ぶことと4枚の包含層(図11: 2～5層)を確認した。3・4層では中世の遺構がそれぞれの上面で認められ、一定レベル以上の密度の疊重を示した。5層では弥生～古墳時代と判断される微細な土器片が僅かに出土したのみで、遺構密度はやや希薄であると予想された。こうしたデータをもとに、発掘調査の計画を進め、2月から調査に入った。土層などの詳細は発掘調査の項で前述しており、ここでは省略する。

(山本)

第4節 立会調査

(1) 津島地区(図16・表1)

津島地区的立会調査は事業別では、17件、計17カ所で行った。大半の調査は掘削深度が浅く造成土内で終了した。ここでは、掘削深度の深かった調査⑯・⑭・⑮について以下に詳細を記す。なお、その他については表1に明記した。

調査⑯は、南北道路のガス管埋設工事に伴う立会調査で、大学敷地内について連続して行った。掘削深度約1.5mで中世に相当すると考えられる水田(粘土層)を確認した。また、その他の地点でも近世の包含層を確認した。

調査⑭は、福利厚生施設新館に伴うその他工事のうち、共同溝新設に伴う工事の立会調査である。この工事は、すでに終了している第14次調査地区に接続する形で行われ、既調査範囲と新設部分との間の未掘部分について調査を行った。この部分の土層については、調査の結果第14次調査と同じ状況を呈していたことを確認した。



図11 土層断面図
(縮尺1/40)

1. 造成土複合層
2. 淡灰色粘土層(軟質)
3. 淡青灰色粘土(中世上部剖面)
4. 暗(茶)灰色シルト層(炭, Mu)
5. 暗灰褐色土(炭, Mu)
6. 淡黄褐色土(Mu, Fu)

調査⑨は、岡山市教育委員会による南北道路における雨水管理工事（堅坑）に伴う立会調査である。この調査は、原凶者が岡山市であるが、工事が大学敷地内であるため、工事地内の埋蔵文化財について関係者の協議の結果、岡山市文化課による調査に大学が立ち会うことになった。調査は、3.35m掘削がされ堅坑地点における上層及び遺構等の状況が確認された（図12）。この地点では、黒色土が確認されなかったが、中世等の遺構が確認され洪水砂が厚く堆積していることから、河道が確認された。

（2）鹿田地区（図17・表1）

鹿田地区における立会調査は、事業別にみると3件、3箇所であり、いずれも造成土内で終了した。

（3）三朝地区（図18・表1）

三朝地区における立会調査は、固体地球研究センター

実験研究棟新営その他の工事に関するものが1件あり、10箇所について行った。調査⑩は、遺跡発見の契機となった立会であり、地表下約4mまで掘削した。調査⑪では、遺跡の状況を確認することができ、近世から繩文まで包含層があることが判明した。これら調査⑩・⑪の層序等については、第1・2次調査において詳述している（第1章第2節）。その他については、いずれも造成土内で終了している。

（4）東山地区（図19・表1）

東山地区における立会調査は、事業別に1件、2箇所についておこなった。

調査⑫は、教育学部付属小・中学校他の周辺改修工事に伴う立会調査である。1.2m掘削した。造成土の厚さは約79cmで、現地表から1.9m下で暗灰色粘土層である近世の水田層を確認した。出土した陶磁器から、江戸末期に相当すると考えられる。その他については、造成土内で終了した。

（小林）

第5節 岡山大学構内における陸軍関連施設の調査

1 文・法・経済学部南庭園測量調査

a. 調査の経緯

岡山大学津島地区の敷地は旧陸軍が1919年（明治44年）に運営した陸軍駐屯地であり、戦後その敷地を引き継いだものである。戦後は旧陸軍の建物群も引き継いで使用しており、順次建

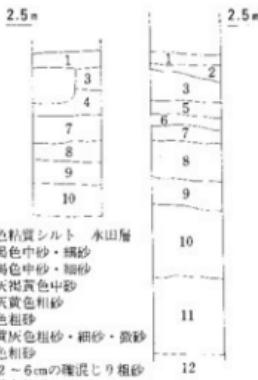


図12 調査⑨土層断面図 岡山市教育委員会

て替えを行って現在に至っている。旧陸軍の建築物は建て替え・取り壇しによって少なくなつたが、一部は現在も利用されている。そのうち、文・法・経済学部棟の南には旧陸軍の造った建物群と庭園がある。この建物群が1998年度に取り壇されることが決まり、埋蔵文化財調査研究センターでは庭園と建物基礎を記録の対象として測量調査を行った。庭園と建物群基礎は測量図による記録、庭園の池の石組み、灯籠、築山上の立石については写真による記録、灯籠に刻まれた文字線刻や文様は写真・拓本による記録を行った。調査は1998年2月18,19日、4月7日、6月18日に断続的に行っている。

b. 測量調査の成果（図13）

今回の調査範囲の北側に位置する木造建築物（現、職員組合事務所）は、旧陸軍工兵第一〇聯隊将校集会所である。庭園はこの将校集会所と一連のものである。庭園は南辺、西辺、東辺を高さ約70~80cmの土塁によって区画されている。この土塁は現在も岡山大学津島北地区の南辺を区画するかたちで約800mにわたって残っているうちの一部である。

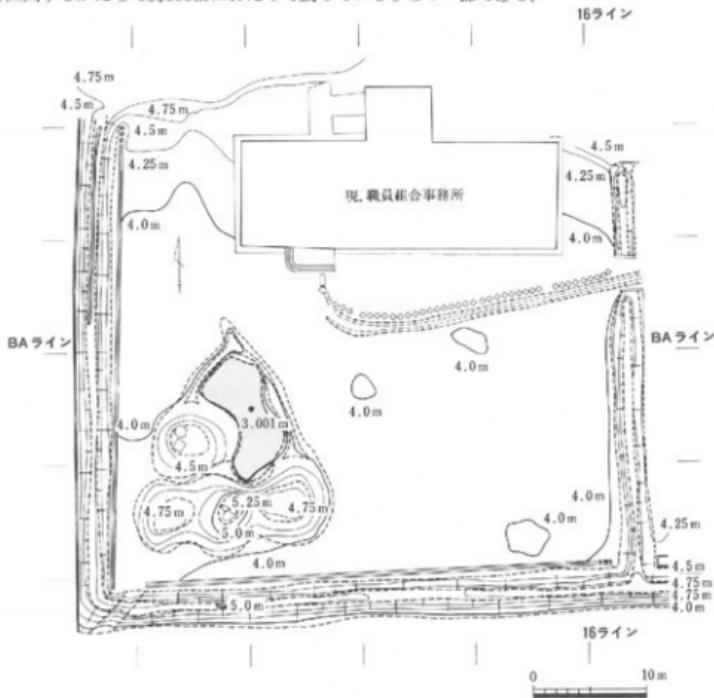


図13 庭園測量図

庭園の中央やや西よりには池が掘削される。池の平面形は瓢箪形を呈する。池の護岸は長辺約40~50cmの角柱状に加工した花崗岩3~4石を積んで頑強に構築している。この護岸は大学構内各所でみられる当時の排水路の護岸にもみられ、この当時の陸軍一七師団駐屯地内では一般的な工法であったことが推測される。

池の南には高さ約1.2~1.5mの築山が築かれる。この築山は4つの頂点をもつが、最も高い頂点には立石がみられる。立石は平板な石を縦位に用いており、平板な面を建物に向けるように立てられている。何らかの効果をねらって立てられたものと思われる。北側の築山の頂点には灯籠が立てられているが、現在、上部の籠部分は安全のため脇に降ろされている。灯籠の台部の円柱には「日支事変出征記念」と刻まれている。

東辺の土塁は北側で幅約1.5mにわたって切られ、集会所への入口となっている。この入口から西に向かっては、約50cm四方の花崗岩を並べてステップとし、建物への導線としている。このステップは角と角を接して配置されており、また、建物入り口に近い位置にのみ五角形の石を配して角度を変えており、その計画性の高さがうかがえる。また、東辺の上塁は駐屯地内で集会所の区画を明示するものであり、特権階級以外の者が立ち入ることを許さなかったことを物語るものであろう。

以上のような特徴にみると、この一画は駐屯地内の特別な空間であり、また庭園は将校集会所からの美観をねらって計画的に造営されたものであることがうかがえる。（野崎）

b. 津島地区における戦争関連遺跡について

かつて津島地区には、第2次大戦前の敗戦時まで陸軍の広大な施設があった。その中枢である第一七師団の創設は明治40年であり、その後大正14年の軍縮を経て昭和へと配置等が変遷している。現在も津島地区内には当時の軍事施設が残存しており、多くは戦後に改修されているものの、往時の名残りを今も見ることができる。今回、旧将校集会所が取り壊しされるにあたり、その庭園跡の測量調査と津島地区内にのこる旧陸軍施設の調査を行った。こうした一連の調査は、旧軍関連施設が「戦争遺跡」として近年学界で盛んに議論されている（註1）状況を考慮したもので、その現状を考古学的に記録するためである。

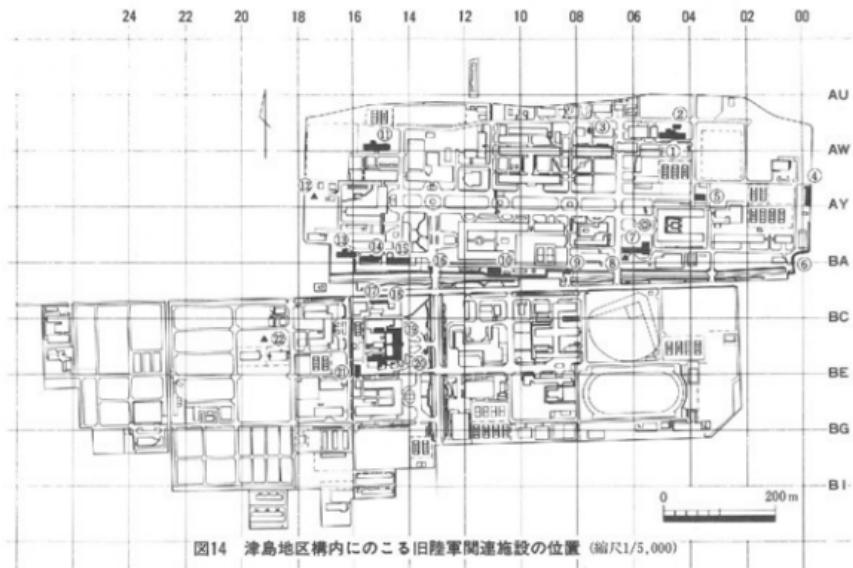
ここではまず、津島地区内に残存する戦争遺跡の主なものについて概観しておく（図14）（註2）。まず建物に関しては、現在大学事務局のある建物が第一七師団・歩兵第三三岡山連隊区の各旅団司令部跡にあたり、ほとんど往時の姿をとどめている（註3）。門の脇には衛兵所の小建物も残る（註4）。①は将校集会所跡で、庭園跡と右灯籠が残存する。将校集会所は、将校幹部の部隊内クラブであり、内装等に当時の建築様式の面影を見ることができる。この東の並びには、旧兵舎の面影をしのばせる連隊本部等の建物2棟が残る（註5）。津島北地区の現在学生部の建物は、広島兵器補給所岡山分所の事務棟跡で内部の各所にかつての面影を残す（註6）。なお、

この建物の南側には、昭和7年建立の砲身形をした軍人勅諭の記念碑が残る(⑧)。赤レンガ造りの建物をいくつか目にすることができるが、それらも関連する建物であり、現在考古学資料館に使用されている建物は工兵連隊の浴場であった(⑩)。その他赤レンガの建物跡としては、現在放送大学岡山学習センターに使用されている兵器補給火薬取扱い施設跡がある(②)。建物以外にも関連するものがあり、津島地区北西にはレンガ造りの残骸となっている箇所があるが、現在ゴミ焼却場になっているその場所は、鉄橋爆破演習場の跡であった。津島北地区の南東隅には、10数メートルの高さのコンクリート擣があるが、この高擣は法界院駅からの引き込み線で搬入された兵器をこの内側で荷ほどきをした場所で外部に対する目隠しであった。

以上のように、津島地区構内には戦争遺跡関連の建物等が多く残存している。構内において、日頃何気なく目にすることのある古めかしい建物にも、それぞれにあまり知らない歴史的背景があることが再確認できた。近い将来、こうした遺跡は、再開発により消滅していく可能性があるので、今回の調査は学界の動向などからみても意義のある作業であろう。今回調査を行ない得られた資料が、今後多方面において活用されれば幸いである。

今回、津島地区構内の戦争遺跡についてまとめるにあたり、実地踏査を含め文章の作成にいたるまで、西川宏氏の教示をえた。

(小林)



註

- 1 西川 宏・角田 茂『岡山市内に遺る戦争遺跡の爪痕』『明日への文化財』38号特集 戦後50年—戦争遺跡、文化財保存全国協議会、1996年3月。
- 2 本図は、1998年5月13日、岡山大学職員組合主催の野外学習会資料（角田 茂『岡大キャンパスとその周辺の戦跡を歩く』）掲載の図から作成した。

表1 1997年度調査一覧

番号	種類	調査地区	所轄	調査名称	調査期間	掘削深度(m)	備考
①	発掘	朝	岡	実験研究棟新宮その他工事 木本工事部分	5.10~20	2.0~2.5	調査面積210m ² 、既存早期・弥生中期・中世層包含層・遺物確認。 〈福島遺跡第1次調査〉
②	発掘	三朝	岡	実験研究棟新宮その他工事 段丘下基礎工事②	7.28	2.0	調査面積25m ² 、1.0mで中世層、 2.0mで黑色層土層。遺物なし。 〈福島遺跡第1次調査〉
③	発掘	三朝	岡	実験研究棟新宮その他工事 スロープ部分調査	11.25~ 12.5	2.8	調査面積120m ² 、近世・中世・ 古代包含層・遺物確認。 〈福島遺跡第2次調査〉
④	発掘	鹿田	張	基礎医学棟新宮	98.2.27 ~3.31	1.4	調査面積820m ² 、近世本田確認。 〈鹿田遺跡第2次調査〉
⑤	試掘	三朝	岡	実験研究棟新宮その他工事 段丘下基礎工事①	7.3	1.66	0.8mで造成土、1.0mでまさ土、 1.4mシルト質の層以下砂層 がラミナ状に堆積。遺物なし。
⑥	試掘	三朝	岡	実験研究棟新宮その他工事 スロープ部分工事③	7.29.30	2.1	黒色層2層確認。
⑦	試掘	三朝	岡	実験研究棟新宮その他工事 電気ハンドホール工事④東	7.3	1.5	造成土内。
⑧	試掘	鹿田	医	基礎医学棟	12.1	2.2	中世・弥生包含層確認。
⑨	立会	二輪	岡	実験研究棟新宮その他工事 揮発部分	4.3	0.5	斜面部分にレンチ3カ所。 地山確認。
⑩	立会	三朝	岡	実験研究棟新宮その他工事 伐倒工事部分	5.7	4.0	GL 1.5mで包含層確認。外 土層片採集。
⑪	立会	三朝	岡	実験研究棟新宮その他工事 木本工事部分	5.9	2.0~2.5	T.事務館西内未調査のうちに 1/2掘削済。斜面で遺構確認。
⑫	立会	津島北AV07	工	精南応用工学科別館給水管系 統切り替え工事	5.18~ 5.20	0.5~0.9	既設工事内。
⑬	立会	二輪	岡	実験研究棟新宮その他工事 理設配管工事⑤	7.2	0.8	遺物なし。造成土厚0.7m。
⑭	立会	三朝	医	実験研究棟新宮その他工事 機械工事⑨	7.2	0.8	造成土?。まさ土。
⑮	立会	二輪	岡	実験研究棟新宮その他工事埋 設配管(給水管)工事⑥	7.2	0.3~0.5	造成土内。
⑯	立会	津島南BB13~ BB13	事	南北道路ガス管埋設工事	7.17~ 8.19	1~1.2	中世層まで掘削。
⑰	立会	津島北BP12	事	公衆電話設置工事(岡山西ア クセス系統設備工事)	7.18	縦石から 0.5	面積2.4×2.4m。造成土内。
⑱	立会	三朝	岡	実験研究棟新宮その他工事 電気理設配管路工事⑦	7.31	1.0	1.0mで中世層。包含層は東に向 かい「面レベル」が上界。
⑲	立会	津島南	事	南北道路ガス管埋設工事	9.4	1.5	中世の粘土層検出。
⑳	立会	津島北BB12~ BB12	事	南福利飯設電柱	9.24	0.7	造成土内。
㉑	立会	津島北AU03~ AX02	環	環境理工学部新宮に伴う仮設 電柱工事	9.25	1.0~1.2	造成土厚0.9m。男防層直下にまさ 土の層確認。
㉒	立会	津島北AX02	環	環境理工学部工事用車両用ス ロープ工事	10.16	0.95	男防耕作上露出。
㉓	立会	津島北	環	環境理工学部新宮に伴うその 他工事 樹木移植	10.16	0.4~1.0	2カ所。建物南側側面3本。 建物北側側面3本。移植先、ボブラン3本。造成土内。

番号	種類	調査地区	所轄	調査名称	調査期間	掘削深度(m)	備考
⑩	立会	津島南BC12	事	福利厚生施設新館に伴うその他工事 共同排水設工事	11.11	2.0	GL-1.65, 造成土厚0.8, 黒色土確認。近世・中世・古代・古代の構造物。
⑪	立会	三朝	國	実験研究棟新館その他工事 施設物置き場基礎工事	12.5	0.75	暗灰色シルト質土まで掘削。
⑫	立会	津島南BP13	事	津島1号幹線(21区)雨水管 埋設工事	12.5	3.35	造成土厚1.0, 黒色土なし。道幅等確認。海水砂厚く堆積。岡山市教育委員会調査。
⑬	立会	三朝	國	実験研究棟新館その他工事 排水管路④	1.13	0.6	マサ土。遺物なし。
⑭	立会	三朝	國	実験研究棟新館その他工事 街灯設置工事⑦	1.13	1.2~1.5	造成土内。
⑮	立会	東山	教	教育学部付属小・中学校施設 改修工事	2.5	2.2	造成土厚0.79m, GL-1.1mで 水田確認。磧1条。
⑯	立会	龜田	医	基礎医学棟新館に伴うその他 工事 樹木移植	2.9	0.5~0.7	調査区北側列のヤクラ椿植 移植先は5カ所いすれも造成 土内。
⑰	立会	津島北BA03~02	教	岡山大学(津島)教育学部他 自動車置き場取設工事 樹木移植 基礎工事	2.17~23	0.8~1.1 (樹木移植) 0.5 (基礎)	16木移植、いすれも造成土内。 基礎も造成土内。
⑱	立会	津島北AV07	工	システム工学科排水管理設工 事	2.19~3.6	0.5	造成土内。
⑲	立会	津島北AV06	環 管	環境管理センター排水管理設 工事	2.26~3.6	0.5	造成土内。
⑳	立会	津島南BF18~20	農	農学部道路敷設工事	3.16~18	0.5~0.9	造成土内。
㉑	立会	龜田	医	自転車置き場基礎	3.17	0.5	造成土内。
㉒	立会	津島南AV07	事	壁支え支柱工事	3.17	0.6	造成土内。
㉓	立会	津島地区全体	事	津島内外灯設施工事	3.18~31	1.2	明治~近世層まで掘削。
㉔	立会	龜田	農	農学部看板設置工事	3.25	0.3	造成土内。
㉕	立会	津島南BC08	事	一般教育棟B棟配管工事	3.30	0.5	造成土内。

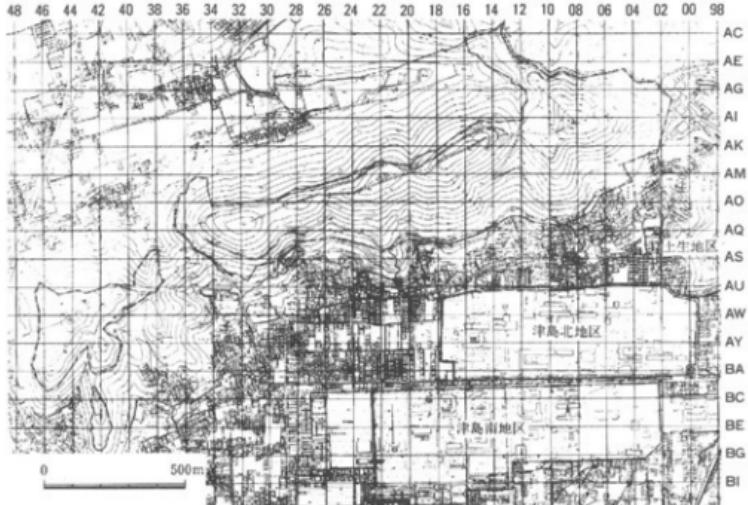


図15 津島地区全体図 (縮尺1/20,000)

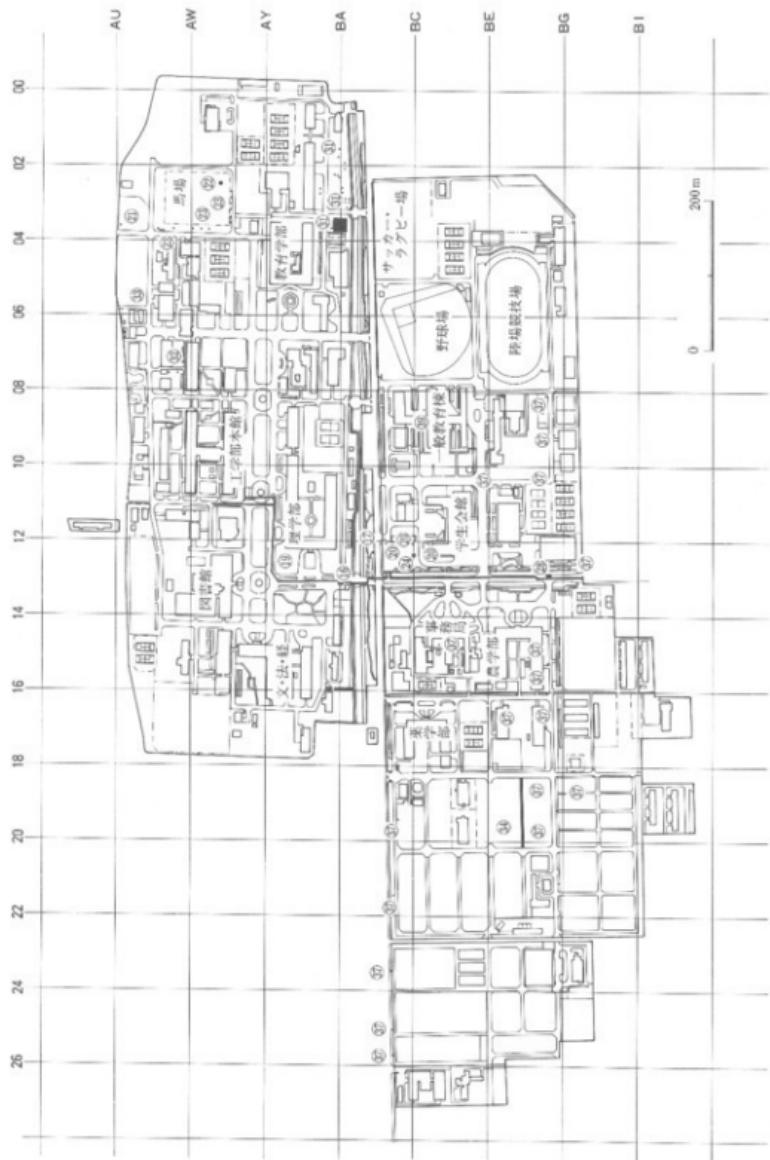
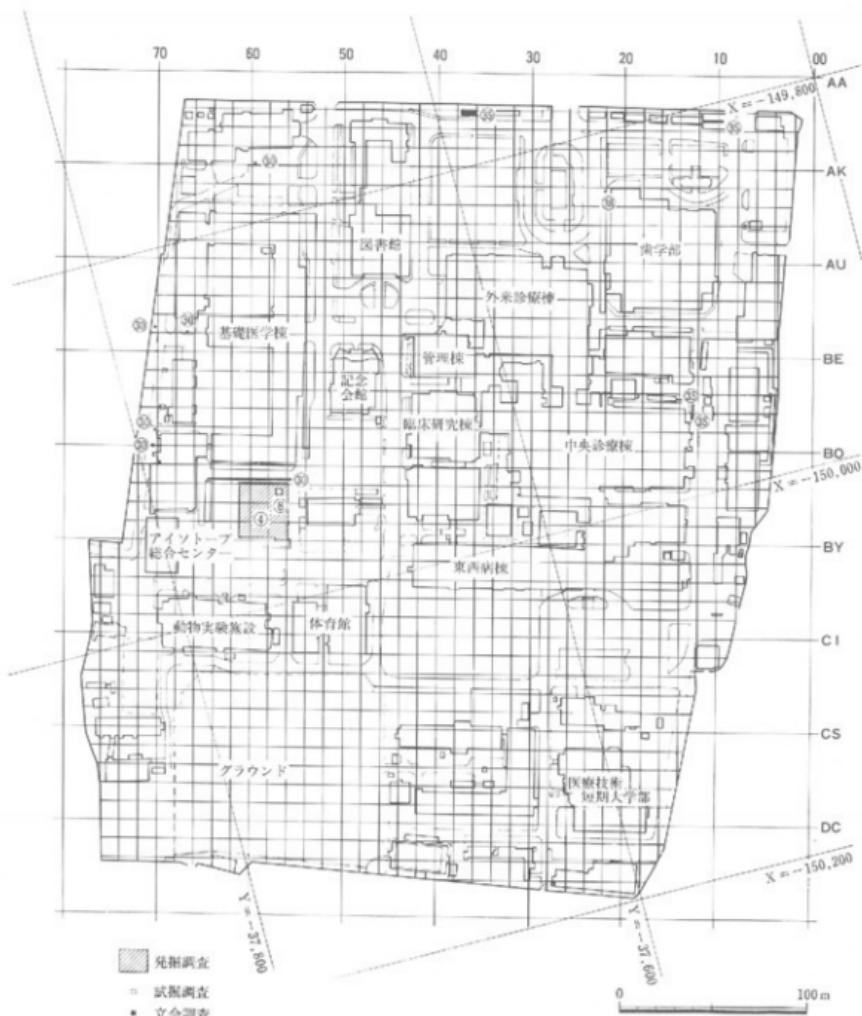


図16 今年度の調査(1) 津島地区 (縮尺1/7,500) 重複取りは試掘・立会調査、数字は表1に対応



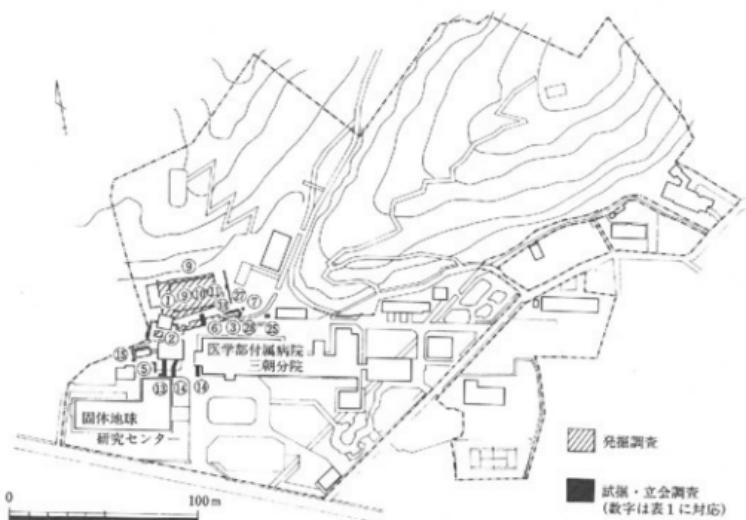


図18 今年度の調査(3) 三朝地区 (縮尺1/3,000)



図19 今年度の調査(4) 東山地区 (縮尺1/4,500) ※数字は表1の番号と同じ

第2章 1997年度普及・研究・資料整理活動

1 資料整理

本年度は次の3件の発掘調査の資料整理を行った。

- ① 津島岡大遺跡第9次調査（工学部生体機能応用工学科棟）：報告書刊行
- ② 津島岡大遺跡第14次調査（福利厚生施設南棟）：報告書刊行
- ③ 津島岡大遺跡第10次調査（保健管理センター）：遺構図整理、遺物の実測

2 分析依頼

- ① 津島岡大遺跡第9次調査出土動物骨の鑑定…奈良国立文化財研究所 松井 章
- ② 津島岡大遺跡第9、12次調査出土種子の分析…岡山大学環境理工学部 沖 陽子

3 刊行物

- | | | |
|---------------------------|----------|----|
| ① 岡山大学構内遺跡調査研究年報14 | 1997年11月 | 刊行 |
| ② 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第18号 | 1997年9月 | 刊行 |
| ③ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊 | 1997年12月 | 刊行 |
| ④ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊 | 1998年3月 | 刊行 |
| ⑤ 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第19号 | 1998年3月 | 刊行 |

4 調査員の活動

(1) 資料収集活動

小林青樹

縄文・弥生移行期における土器資料の調査：香川県埋蔵文化財センター他

弥生時代における網を中心とした織維組織の材質と技法に関する研究：国立歴史民俗博物館他

野崎貴博

北部九州の埴輪資料の実査：福岡市埋蔵文化財センター

前・中期古墳の踏査：鳥取県、福岡県

山本悦世

縄文・弥生移行期における遺物（土器・木器）の調査：愛媛県阿方遺跡

博物館の実態調査：滋賀県立琵琶湖博物館

(2) 学会・研究会参加等

小林青樹

考古学研究会総会（4月）、日本考古学協会総会（5月）、日本文化財学会（10月）他
野崎貴博

考古学研究会総会（4月）、日本考古学協会総会（5月）、全大協中・四国教研集会（6月）、古代学協会四国支部研究集会（9月）

山本悦世

考古学研究会総会（4月）、日本考古学協会総会（5月）、中四国縄文研究会（6月）
横田美香

考古学研究会総会（4月）、日本考古学協会総会（5月）、古代の土器研究会（11月）

(3) 研究発表他

小林青樹

「長野県小諸市氷遺跡の研究 中部高地における縄文時代晚期終末期の研究」日本考古
学協会 第63回総会（5月）

「縄文時代晚期終末期の土器の胎土分析—長野県小諸市氷遺跡の氷式土器の胎土分析」第
14回日本文化財学会（10月）

野崎貴博

「岡山大学における埋蔵文化財問題の現状と課題 全国大学高専教職員組合中・四国教職
員研究集会（6月）

「埴輪製作技法の伝播とその背景 考古学研究会例会（9月）

(4) 論文・資料報告

小林青樹

「岡山市八幡大塚2号墳の再検討」『古代吉備』第19集（共著）

「土器作りの專業製作と規格性に関する民族考古学的研究 フィリピンとタイの事例分析
を中心に」『民族考古学序説』同成社

「縄文時代晚期終末期の土器の胎土分析—長野県小諸市氷遺跡の氷式土器の胎土分析」
『日本文化財学会 第14回研究発表要旨集』（共著）

「長野県小諸市氷遺跡の研究—中部高地における縄文時代晚期終末期の研究—」『日本考
古学協会 第63回総会発表要旨』（共著）

「タイ国ビマイ寺院遺跡」『考古学研究』第43巻3号

「弥生時代早前期における沖島岡大遺跡とその周辺」『沖島岡大遺跡』10 岡山大学構内遺
跡発掘調査報告 第14冊

「先史考古学における GIS（地理情報システム）を利用した景観考古学の可能性」『地理情報システム学会第4回大会講演論文集』

野崎貴博

「岡山市八幡大塚2号墳の再検討」『古代吉備』第19集（共著）

「岡山平野における正方位方格地割水田の出現」『津島岡大遺跡』10・岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊

山本悦世

「津島岡大遺跡出土古代土器の再検討」『津島岡大遺跡』10・岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊

横田美香

「岡山市八幡大塚2号墳の再検討」『古代吉備』第19集（共著）

5 日誌抄

1997年

- 4月8日 第1回月例会議
- 4月21日 運営委員会開催
 - ・平成8年度決算
 - ・平成9年度予算案
 - ・平成9年度事業計画
- 4月28日 岩崎志保助手育児休業（1998年5月31日まで）
- 5月1日 第2回月例会議
- 5月10日 福岡遺跡第1次調査開始
- 5月20日 福岡遺跡第1次調査終了
- 5月28日 管理委員会開催
 - ・平成8年度決算
 - ・平成9年度予算案
 - ・平成9年度事業計画
- 6月2日 第3回月例会議
- 7月10日 第4回月例会議
- 7月22日 井口三智子臨時用務員採用
- 8月5日 第5回月例会議
- 8月21日 博物館実習開始 受講生25名（8月29日まで）
- 9月5日 第6回月例会議
- 9月22日 センター報18号納品
- 10月2日 第7回月例会議
- 10月31日 10周年記念冊子『今、よみがえる古代』納品
- 11月5日 第8回月例会議
- 11月8日 埋蔵文化財調査研究センター設置10

周年記念講演会・見学会開催

- 11月10日 岡山県立博物館へ資料貸し出し
 - 11月21日 第9回月例会議
 - 11月26日 福岡遺跡第2次調査開始
 - 11月28日 宇藤桜子、井口三智子臨時用務員退職
 - 12月5日 福岡遺跡第2次調査終了
 - 12月9日 第10回月例会議
 - 12月15日 年報14納品
 - 12月18日 センター建物内ワックスがけ
 - 12月25日 岡山県立博物館貸し出し資料返却、大掃除
 - 12月26日 『津島岡大遺跡』9納品、御用納め
- 1998年
- 1月5日 御用始め
 - 1月6日 第11回月例会議
 - 1月7日 『津島岡大遺跡』9、10周年記念誌『今、よみがえる古代』、年報14、センター報20号発送
 - 運営委員会開催
 - ・平成11年度国立学校施設整備費概算要求事業表（案）
 - ・岡山大学総合研究博物館構想について
 - ・医学部校舎新館に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施について
 - ・固体地球研究センター実験研究棟新館に伴う埋蔵文化財発掘調査結

	果について	
1月20日	岡山市教育委員会と調査に関する協議	2月18, 19日 文・法・経済学部南庭園測量調査
1月28日	管理委員会開催 ・平成11年度概算要求事項について ・岡山大学総合博物館構想について ・平成9年度発掘調査の実施について	2月26日 鹿児島遺跡第7次調査開始 3月2日 第13回月例会議 3月25日 センター報19号納品 3月30日 『津島岡大遺跡』10納品, 『津島岡大遺跡』10, センター報19号発送, 杉山千恵技術補佐員退職
2月2日	第12回月例会議	

6 1997年度までの遺物保管状況

1998年3月31における本センターの遺物収蔵量は表2に掲げるとおりで、約30リットル収納のコンテナに換算すると約2145箱である。昨年度に比較して約11箱の増加になった。発掘調査では福呂遺跡第1・2次調査を行っており、福呂遺跡ではあわせて約11箱の遺物が出土した。また、試掘・立会調査での出土遺物は少なく、昨年度までの収蔵量と大差ない。

遺物保管状況については、土器資料の多くは1997年度までに洗浄作業を進行させており、収蔵庫に圧迫した状況は解消されつつある。しかし、土器以外の遺物については今後の整理分析作業により最終的な収納形態を整えるうえ、発掘調査が毎年行われており、箱数は増加することが見込まれる。これらは年々確実に増加し続けており、近い将来収蔵容量を超えることが予想される。

7 遺物の保存処理

本センターでは1992年度から構内遺跡から出土した木製品について、PEG（ポリエチレンリコール）含浸による保存を行っている。第1期保存処理は1992年7月から1993年11月まで、第2期保存処理は1994年6月から1996年8月まで行った。第3期保存処理は1996年12月から開始し、1996年度末までにPEG濃度を25%まで上昇させた。1997年度の濃度上昇工程は以下のとおりである。

1997年6月10日 25→40% 9月8日 40→50% 1998年1月20日 50→60%

第2期保存処理では1ヶ月半～2ヶ月毎に5%ずつ濃度上昇を行ったが、第3期保存処理では約3ヶ月毎に10%ずつ濃度上昇を行った。1997年度は60%まで濃度上昇を行い、来年度に継続することとなった。

表2 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要

所属	種類	地 調 査 名 称	箱 数(1箱:約30L)					備 考 主要時期・特殊遺物	文 獻
			總 数	土 器	石 器	木 器	その 他 サンプル		
医病	発掘	鹿田第1次調査(外来診療便)	608	491	6	60	1 ガラス 鉄 器 織物 他	弥生中期～中・近世 復甲状・纏状木器等	⑦
" "	"	鹿田第2次調査(NMR-CT前)	116	90	3	20	3	弥生後期～中世、舟形・木筒等	"
医病	"	鹿山第3次調査(校舎)	131	36		90	5	古代、鐵製品	⑧
" "	"	鹿田第4次調査(配管)	3	2			1	古代、鐵製品	"
医病	"	鹿田第5次調査(管理棟)	119	79	1	20	19	弥生後期～中・近世	⑨
ア	"	鹿田第6次調査 (アイントープ総合センター)	39	29.5	0.5			中世、青銅製鏡	⑩
全	"	津島岡人第1次調査(NP1)	4			4		弥生中期～古代	⑪
農	"	津島岡大第2次調査 (合併地耕種)	18		1		4	弥生早期～弥生前期	⑫
		排水管			7				
					6				
学生	"	津島岡大第3次調査 (男子学生寮)	71	49	10	2	10	縄文後期～弥生、古代～近世 石製指輪、蛇鱗状土器片	⑬
" "	"	津島岡人第4次調査 (屋内運動場)	1	1				弥生早期～弥生前期 (試掘調査遺物を含む)	⑭
大自	"	津島岡大第5次調査 (大学院自然科学研究科棟)	89	55	2		32	縄文後期～弥生、古代～近世 耳栓・木製櫛(縄文)	⑮
丁	"	津島岡人第6次調査 (生物応用工学科棟)	63	30	1	22	10	縄文後期～近世 人形木器、アンペラ	⑯
" "	"	津島岡大第7次調査 (情報工学科棟)	13	7	1		5	縄文後期～近世	"
全	"	津島岡人第8次調査 (遺伝子実験施設)	14	12.9	0.1		1	縄文後期～近世	⑰
工	"	津島岡大第9次調査 (牛体機能応用工学科棟)	258	35		3	220	縄文後期～近世	⑱
全	"	津島岡人第10次調査 (保健管理センター)	55	40		5	10	弥生前期～近世	⑲
" "	"	津島岡大第11次調査 (総合情報処理センター)	4	2			2	縄文後期～近世	⑳
" "	"	津島岡大第12次調査 (図書館)	71	40	1	20	10	縄文後期～近世	㉑
" "	"	津島岡大第13次調査 (福利厚生施設 北)	17	17				縄文後期～古墳前期・中世	㉒
" "	"	津島岡人第14次調査 (福利厚生施設 南)	16	15			1	弥生～古墳	㉓
" "	"	津島岡大第15次調査 (サテライトポンチャービジネスラボセンター)	355	25	10	20	300	縄文後期・弥生早期～中世 アンペラ	"

所属	種類	地 調 査 名 区 称	箱 数(1箱:約30L)						備 考 主要時期・特殊遺物	文 獻 番 号
			總 数	土 器	石器	木製	その他	サンプル		
農業・発掘		沖島岡大第16次調査 (動物実験棟)	0.3	0.3					縄文後期・弥生～中世	⑥
環	"	津島岡大第17次調査 (環境理工学部)	60	50	1	1		8	縄文後期～近世	"
國	"	固体地球研究センター (実験研究棟)	9	8				1	縄文早期・弥生中期・小世	⑦
國	"	固体地球研究センター (実験研究棟スロープ)	2.1	2			0.1		中世～近世	"
疾病	試掘	鹿田駕車場	1	1					弥生～中世	⑧
学生教育	"	津島北 男子学生寮 研究棟	1	0.7	0.3				縄文後期～弥生前期	"
大自	"	自然科学研究科棟	1	1					縄文後期～弥生前期	⑨
事	"	津島 外国人宿舎(七生)	1	1					縄文～中世	⑩
理	"	津島北 身障者用エレベーター	0.3	0.3					中・近世	"
教養	"	津島南 "	0.7	0.7					縄文・中世	"
工	"	津島北 校舎	1	1					縄文～近世	⑪
農業	"	津島南 動物・遺伝子実験施設	0.7	0.7					縄文～弥生・中・近世	"
事	"	津島南 國際交流会館	0.3	0.3					中世	"
大自	"	津島北 合併施設	0.2	0.2					中・近世	⑫
学生	"	津島南 学生合宿所	0.4	0.2			0.2	小世	"	"
教育	"	津島北 身障者用エレベーター	0.3				0.3	縄文	"	"
國	"	津島北 図書館	0.8	0.8					古墳～中世	"
学生	"	津島南 学生合宿ボンスピット	0.4	0.4					縄文～中世	⑬
資生	"	倉敷 資源生物科学研究所	0.1	0.1					近世	"
ア	"	鹿田 アイソトープ総合センタ	1	1					小世～近世	"
事	"	津島北 福利厚生施設	0.5	0.5					弥生?～中世	"
農	"	津島南 動物実験施設	0.1	0.1					縄文?～近世	⑭
全立会	"	'82年度	2	2					分銅形土製品	⑮
"	"	'84年度	1	1						⑯
"	"	'85年度	1	1						⑰
"	"	'86年度	0.5	0.5						⑱
"	"	'87年度	0.5	0.5						⑲
分庫	"	'89年度 三朝・本島	0.3	0.3						⑳
全立会	"	'91年度 '92年度	0.3	0.3						㉑ ㉒
"	"	'93年度 '94年度 '95年度 '96年度 '97年度	0.6	0.6						㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗
施 箱 数			2144.4	1146.2	37.9	267	1.1	692.2		

※文献番号は附表3・4に対応する。文献番号は本年報15を指す。

8 10周年記念事業

本センターは1997年11月26日をもって設置10年を経過した。そこで10年の活動を記録し、その成果を広く普及することを目的に「今、よみがえる古代」と題して講演会、遺跡見学会を企画、実施した。また、同名の冊子『今、よみがえる古代』を刊行した。ここでは講演会、遺跡見学会の概要を中心にその成果を記しておきたい。

a. 記念講演会

記念講演会は1997年11月8日に大学院自然科学研究科棟2階講義室で開催した。小坂二度見岡山大学学長の挨拶のあと、狩野久岡山大学文学部教授に「『津島』の地名の由来」、稻田孝司岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長に「縄文人のくらし—ドングリ穴と落とし穴—」と題して講演していただいた。

b. 遺跡見学会

遺跡見学会は記念講演会終了後、午後1時に岡山大学学生会館を出発した。見学コースは大学北側の半田山山塊にひろがる古墳・城跡をめぐるコースと、大学南側の弥生・古墳時代の遺跡をめぐるコースの2班に分かれて行った(図20)。参加者は各コースとも24~25名あり、学内関係者の参加も多くみられた。各コースともセンター

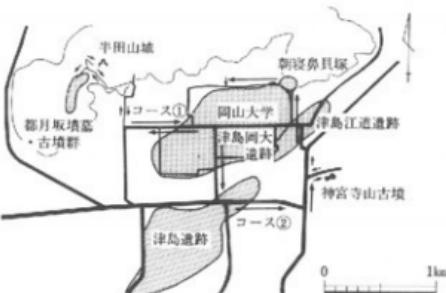


図20 遺跡見学会のコース

助手が案内し、岡山大学構内遺跡と大学周辺に広がる遺跡との関係を説明した。

記念講演会、遺跡見学会とも大変好評であった。このような普及活動を継続的に行うことによって、埋蔵文化財調査研究センターの業務や研究成果を学内外の多くの人に知ってもらう機会を設け、今後のセンターの業務の幅を広げていく必要がある。

(野崎)

9 資料の貸し出し

岡山県立博物館 新発見考古速報展『吉備 大地からのメッセージ』

貸し出し資料名

木製短甲1, 木製桶1, 耳栓2, 石製指輪1, 櫛1, 石包丁1, 縄文土器(深鉢)2, ガラス
津一括, 炉1, 写真原版4

第3章 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

第1節 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程

1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

(設置)

第1条 岡山大学（以下「本学」という。）に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

(目的)

第2条 センターは、本学の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護をはかることを目的とする。

- … 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 一 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。
- 二 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項

(自己評価)

第2条の2 センターは、岡山大学学則（昭和26年岡山大学規程第32号）第1条の2の定めるところにより、センターの係る点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行うものとする。

2 前項の自己評価を行うため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「自己評価委員会」という。）を置く。

3 自己評価委員会に関する規程は、別に定める。

附 則

この規程は、平成5年2月25日から施行する。

○岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの研究活動等についての点検及び評価を行うこととするため。

(センター長)

第3条 センターにはセンター長を置く。

- 2 センター長は、専門的知識を有する本学の教授の中から学長が命ずる。
- 3 センター長は、センターに関する業務を掌理する。
- 4 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(調査研究室)

第4条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

- 2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。
- 3 室長は、専門的知識を有する本学の教官の内から学長が命ずる。
- 4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。
- 5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

(調査研究専門委員)

第5条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

- 2 専門委員は、本学の教官の内から学長が命ずる。
- 3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(管理委員会)

第6条 本学に、センターの管理運営の基本方針を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）を置く。

2 管理委員会に関する規程は、別に定める。

(運営委員会)

第7条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に関する規程は、別に定める。

(事務)

第8条 センターの事務は、施設部企画課において処理する。

(趣則)

第9条 この規程に定めるものほか、センターに関し必要な事項は、学長が別に定める。

附 則

1 この規程は、昭和62年11月26日から施行する。

2 この規程施行後最初に任命されるセンター長、室長及び専門委員の任期は、第3条第4項、第4条第5項及び第5条第3項の規定にかかわらず、昭和64年3月31日までとする。

○設定理由

岡山大学の敷地内の埋蔵文化財の発掘調査などの業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図るため、学内施設として、新たに岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを設置すること及びその組織等必要な事項について定めるため。

2 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規程

(趣旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規定第48号）第6条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 管理委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針その他重要な事項を審議する。

(組織)

第3条 管理委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 学長
- 二 各学部及び教養部長
- 三 自然科学研究科長
- 四 資源生物研究所長
- 五 附属図書館長
- 六 各附属病院長
- 七 地球内部研究センター長
- 八 学生部長
- 九 医療技術短期人学部主事
- 十 事務局長

十一 埋蔵文化財調査研究センター長

(委員長)

第4条 管理委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

2 委員長は、管理委員会を召集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求める、その意見を聞くことができる。

(幹 事)

第6条 管理委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

(庶 務)

第7条 管理委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

附 則

この規程は、昭和62年11月26日から施行する。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針等を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会に関し、必要な事項を定めるため。

3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規定第48号）第7条

第2項に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

(組 織)

第3条 運営委員会は、次の号に掲げる委員で組織する。

一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二 本学の教授のうちから学長が命じた者若干名

三 センターの調査研究専門委員から学長が命じた者1人

四 センターの調査研究室長

五 施設部長

2 前項第2号の任期は、1年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を召集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求める、その意見を聞くことができる。

(庶 務)

第6条 運営委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

附 則

- この規程は、昭和62年11月26日から施行する。
- この規程施行後最初に任命される第3条第1項第2号の委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、昭和64年3月31日までとする。

○設定期由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの運営に関する具体的な事項を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会に關し、必要な事項を定めるため。

4 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規程第48号）第2条の2第3項の規定に基づき、岡山埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営に關し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）に係る点検及び評価の実施に關し、必要な事項を審議する。

(組 織)

第3条 委員会は次の各号に掲げる者で組織する。

- 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
- 埋蔵文化財調査研究センター調査研究室長
- センターに勤務する教官のうちから若干名
- 埋蔵文化財調査研究センター運営委員会委員のうちからセンター長が委嘱した者若干名
- 施設部長

2 前項に定める委員のはか、センター長が必要と認めた者を加えることができる。

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

(会 議)

第5条 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

2 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

(庶 務)

第6条 委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

(雜 則)

第7条 この規程に定めるもののほか、委員会に關し必要な事項は、別に定める。

附 則

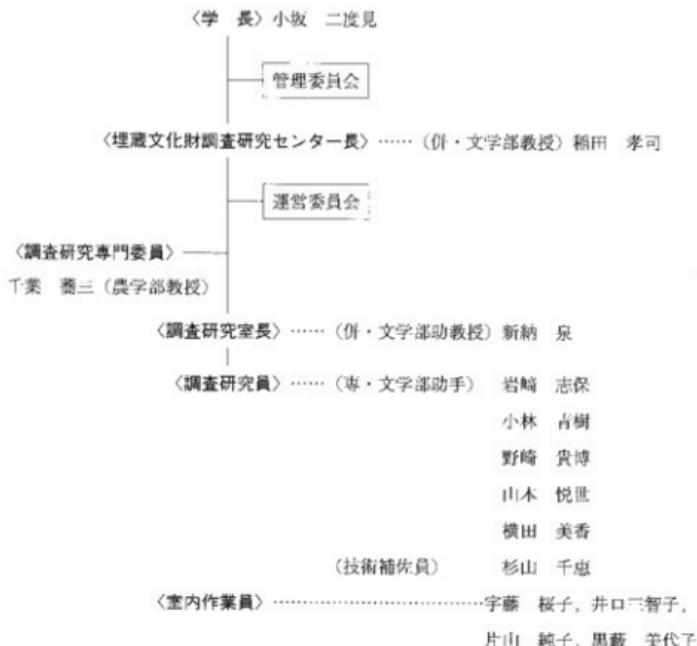
この規程は、平成5年2月25日から施行する。

○設定期由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの研究活動等についての点検及び評価の実施に関する必要な事項を審議するために置く岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会について、必要な事項を定めるため。

第2節 1997年度埋蔵文化財調査研究センター組織

1 センター組織一覧



2 管理委員会

委員

学長	小坂 二度見	文化科学研究科長	岩間 一雄
文学部長	成田 常雄	自然科学研究科長	岩見 基弘
教育学部長	松畠 熙一	資源生物科学研究所長	青山 繁
法学部長	植松 秀雄	附属図書館長	神立 春樹
経済学部長	坂本 忠次	医学部附属病院長	大森 弘之
理学部長	佐藤 公行	衛生学部附属病院長	村山 洋二
医学部長	産賀 敏彦	固体地球研究センター長	久城 育夫
歯学部長	松村 智弘	医療技術短期大学部長	遠藤 浩
薬学部長	篠田 純男	学生部長	伊澤 秀而

工学部長	中島 利勝	事務局長	藤井 武
農学部長	内田 仙二	埋蔵文化財調査研究センター長	稻田 孝司
環境理工学部長	河野 伊一郎		

幹 事

庶務部長	厚谷 彰雄	総理部長	黄楊川英了
施設部長	井内 敏雄		

審議事項

1997年5月28日 平成8年度埋蔵文化財調査研究センター決算について
平成9年度埋蔵文化財調査研究センター予算について

1998年1月28日 平成11年度概算要求事項について
岡山大学総合研究博物館構想について
平成9年度発掘調査の実施について

3 運営委員会

委 員

センター長	稻田 孝司 医学部教授	村上 宅郎
文学部教授	狩野 久 農学部教授	千葉 喬三(調査研究専門委員)
理学部教授	柴田 次夫 事務局	井内 敏雄(施設部長)
経済学部教授	建部 和広 埋蔵文化財調査研究センター	新納 泉(調査研究室長)

審議事項

1997年4月21日 平成8年度埋蔵文化財調査研究センター決算について
平成9年度埋蔵文化財調査研究センター予算案について

1998年1月7日 平成11年度国立学校施設整備費概算要求事業表(案)について
岡山大学総合研究博物館構想について
医学部校舎新館に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施について
固体地球研究センター実験研究棟新館に伴う埋蔵文化財発掘調査結果について

第4章 1997年度活動のまとめ

本年度は種田孝司センター長以下、年度当初は助手5名、技術補佐員1名の業務体制で構内遺跡の調査及び整理分析作業を行った。5月からは助手1名が特別休暇・育児休業をとり、助手4名、技術補佐員1名の体制となった。今年度は年度当初には調査が予定されていなかったが、5月に三朝地区固体地球研究センター実験研究棟新営工事において遺跡を小時発見するに至り、急遽発掘調査を行った（福呂遺跡第1次調査）。実験研究棟新営工事は既に着工しており、周辺の調査は工事工程にあわせて7、11、12月に行った（福呂遺跡第2次調査）。また、年度後半になって医学部基礎医学棟新営工事が着工されることとなり、1998年2月から調査を開始した（鹿田遺跡第7次調査）。鹿田遺跡第7次調査は1998年度も調査を継続している。

福呂遺跡第1次調査は、工事範囲の半分が既に破壊された状況であったが、工事による掘削を免れた部分と第2次調査地点では遺構・包含層が良好に残存していた。包含層は古代～中世、弥生、縄文の3層を確認し、各層で溝、ピット群、大形土坑、埋設土器、軌跡などの遺構を検出した。これまでの分布調査では丘陵上に古墳数基を確認しているが、縄文早期、弥生、古代・中世の遺構は確認していない。縄文土器は九州に分布の中心がある土器であり、縄文時代の交流を考えるうえで重要な資料である。また、古代・中世の遺構が良好な状態で検出されたことは、三朝町に所在する三徳山三仏寺との関係を考えるうえで重要である。今回の調査は三朝町の地域史を考えるうえでも重要な資料を提供したといえよう。鹿田遺跡第7次調査は1997年末から調査に着手し、近世の溝と吐畔を検出した。明確な水田遺構は鹿田地区では各時期を通して初めて検出されたものである。今後の調査でも重要な知見が得られるものと期待される。

室内の整理作業の成果としては、『津島岡大遺跡』9、『津島岡大遺跡』10の2冊の報告書の刊行がある。工学部生体機能応用工学科棟の調査（1992年度）と、福利厚生施設南棟の調査（1995年度）の成果をまとめたものである。定期刊行物では構内遺跡調査研究年報14、センター報18・19号を刊行した。

本年度は本センター設置10周年にあたり、記念事業として講演会・遺跡見学会を行い、10年の活動をまとめた『今、よみがえる古代』を刊行した。講演会、遺跡見学会とも多くの参加者があり、センターの活動を広く周知するとともに理解を深めることができたと思われる。

本年度は発掘3件（内1件は1998年度に継続）、試掘2件の調査を実施し、2冊の報告書を刊行したうえ、10周年記念事業を行うなど、その活動成果は充実していた。また、保存処理作業など、かねてからの懸案事項も解消しつつある。今後も学内外を問わず調査成果の公開など普及・啓蒙活動を続け、埋蔵文化財に対する更なる理解の深化をはかる必要がある。（野崎）

附 表

附表1 1982年度以前の構内主要調査(1980~1982年度)

年度	遺跡名 調査地区名	種類	所長	調査名 称	調査組織	調査面積(m ²)	文献	備 考
1980	龜田	立会	南	附属病院跡新宮	岡山市教育委員会	8		
1981	津島南 BD26	"	廣	寄宿舎新宮	"			
	津島北	"	文法	合併處理構埋設	"			
	津島北	"	文法	合併處理構埋設 跡	"			
	津島南 BD09 BC09~11	"		高幹施設(共同蔵取付)	"			
	津島南 BD~BD04~07	"		陸上競技場改修 (配水管埋設)	"			
	龜田	"	次病	向気庄治療室新宮	"			
	"	"	動物実験施設新宮	"	岡山県教育委員会		試掘調査をせざば残存壁 面等の調査	
	"	"	病理解剖体臓器處理保管 室新宮	岡山市教育委員会				
	"	"	医	運動場改修	"			
1982	津島 AV06~10 AW05~14 AN08,BD07 BK10	試掘		排水溝整備	"			津島AV14区で弥生時代包 含層確認、磁磚
	小橋法日黒 津島北 AW14	発掘	汎文	配水管集中管(NP-1)埋設	岡山大学	24.0	③	(津島町人第1次調査)
	津島南	試掘	学生	武道館新宮	岡山市教育委員会	2.3		
	津島北 AY15~16	"	法經	校舎新宮	"	7.0		
	龜田	"	医	標本保存庫新宮	岡山県教育委員会	8.0		
	"	"	医病	外来診療棟新宮	岡山市教育委員会	4.0	2	
	"	立会	次	動物実験施設樹木排水 管・ガス管理設	岡山県教育委員会		1	
	龜田 AK~AK22 AK22~26	"	廣	電話ケーブル埋設	岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化 財調査室			

※文献1 光永貞一「岡山人字医学部附属病院動物実験施設新宮工事に伴う排水管設工事に伴う立会調査」『岡山
埋蔵文化財報告』13 1983 岡山県教育委員会

2 河木 清「岡山人字医学部附属病院外診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 1983
岡山県教育委員会

③番号は附表3の番号に対応する。

附表

附表2 1996年度以前の構内主要調査（1983～1996年度）

附表2-（1）発掘調査

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	調査期間	面積	概要	文献
2	1983	9	鹿 田	AU～BD28～40	医病	外來診療棟新宮 (鹿田第1次調査)	7.27～11.22 '84.1.9～3.31	2188	弥生時代中期後半～中・近世集落址	⑦
3	1983	10	鹿 田	BG～BII8～21	医病	NBII CT室新宮 (鹿田第2次調査)	8.1～12.30	176	弥生時代後期～中世集落址	⑦
10	1983	11	津島南	BE14-18 BF17-18 BH14-15	農	排水管埋設 (津島岡大第2次調査)	'84.1.9～3.5	285	弥生早期～前期集落址	④
10	1983	12	津島南	BH13	農	合併処理槽埋設 (津島岡大第2次調査)	11.14～11.22 '84.1.9～3.5	276	弥生早期～前期集落址	④
2	1984	3	鹿 田	AU～BD28～40	医病	外來診療棟新宮 (鹿田第1次調査)	4.1～8.31	2188	弥生時代中期後半～中・近世集落址	⑦
31	1985	1	鹿 田	CX～CZ27-28 CT～CY10～27 CX～DD16～25 DD～DC22-23	医病	校舎新宮 (鹿田第3次調査)	6.2～11.29	2390	古代～近世の集落址	⑧
36	1986	2	津島北	AV00 AW00-01	学生	男子学生寮新宮 (津島岡大第3次調査)	12.1～'87.3.31	1550	古代～近世の水田址	⑨
36	1986	3	津島南	BF-BG09	学生	屋内運動場新宮 (津島岡大第4次調査)	'87.1.19～1.22	70	弥生時代前期溝、中世 河道	⑩
36	1987	1	津島北	AV00 AW00-01	学生	男子学生寮新宮 (津島岡大第3次調査)	4.1～6.18	1550	弥生の集落址	⑪
36	1987	1	津島北	AV00 AW00-01	学生	男子学生寮新宮 (津島岡大第3次調査)	8.24～9.5	90	繩文後期～弥生早期の 河道	⑫
52	1987	2	鹿 田	BB～BB35～42	医病	管理棟新宮 (鹿田第5次調査)	10.6～'88.3.2 '88.3.23～3.31	1192	弥生中期後半～中・近 世集落址	⑬
54	1987	3	鹿 田	DD～DE25 DG～DI27-28	医病	校舎周辺の配管 (鹿田第4次調査)	11.2～11.21	30	古代の河道	⑭
65	1988	1	津島北	AY06～08 AZ06-07	大白	自然科学研究科棟 (津島岡大第5次調査)	6.27～'89.3.19	1537	繩文後、弥生早期の野 菜園穴と河道、弥生～近 世の水田址	⑮
67	1988	2	津島北	AV-AW04-05	工	生物応用工学科棟 (津島岡大第6次調査)	9.20～'89.3.31	600	繩文後期～弥生早期の 野菜園穴と河道、弥生～ 近世の溝と水田址	⑯
79	1988	3	津島北	AV-AW05-06	T	情報工学科校舎 (津島岡大第7次調査)	10.12～'89.3.31	800	繩文後期～弥生早期の 野菜園穴と河道、弥生～ 近世の溝と水田址	⑰
67	1989	1	津島北	AV-AW04-05	工	生物応用工学科棟 (津島岡大第6次調査)	4.1～5.31	600	繩文後期～弥生早期の 野菜園穴と河道、弥生～ 近世の溝と水田址	⑱
65	1990	1	津島北	AY-AZ08	大白	自然科学研究科棟 (津島岡大第5次調査)	4.3～4.21	90	古墳時代後期の溝	⑲
92	1990	2	鹿 田	BW～CG67～71	ア	アイソートープ総合セン ター(鹿田第5次調査)	11.20～'91.3.31	890	鍾乳時代の溝・井戸、 建物群	⑳
92	1991	1	鹿 田	BW～CG67～71	ア	アイソートープ総合セン ター(鹿田第6次調査)	4.1～6.30	890	鍾乳時代の溝・建物群； 土器ほか、弥生～古墳、 時代の溝・土塁；1基	㉑

総合番号	年度	番号	測跡名	調査地区	所調	調査名 称	調査期間	面積	概要	文献
96	1991	2	津島南	B018-19	農	遠心子実験施設 (津島岡大第8次調査 A地点)	7.23~12.25	650	弥生時代~近世の溝等 縄文時代土壌・土器・ 石器他	③
96	1991	3	津島南	B013	農	合併処理槽 (津島岡大第8次調査 B地点)	7.23~12.2	140	古代~近世の水田址 弥生土器・石器他	③
104	1992	1	津島北	AU~AW04	工	歩行機能応用工学科 (津島岡大第9次調査)	7.1~'93.1.29	650	縄文後期・弥生早期の 野廬穴・河道ほか・ 弥生~近世の溝と水田址	③ ④
108	1992	2	津島南	BB~BC10~11	保	保健管理センター (津島岡大第10次調査)	'93.2.1~3.31	400	近世耕地・野菜ほか	⑤
108	1993	1	津島南	BB~BC10~11	保	保健管理センター (津島岡大第10次調査)	4.17~7.31	400	弥生時代後期の土壌等 弥生~古墳時代井戸・ 土壙・古墳時代住居址 ほか	④
115	1993	2	津島北	AV~AW11~12	情	総合情報処理センター (津島岡大第11次調査)	9.14~'94.1.11	640	縄文後期~弥生前期窪 穴状遺構・弥生中期水 田址・吉墳時代本田址 ほか	③
127	1993	2	津島北	AV~AW13~14	國	図書館 (津島岡大第12次調査)	'94.2.9~3.31	1472	縄文時代土坑 弥生~ 古墳時代の溝・水田畦 畔・古代窪・畦畔 中 凹溝ほか	③ ④
134	1994	2	津島北	AW~AX11~12	事	福利厚生施設北棟 (津島岡大第13次調査)	10.6~11.30	816	近世の耕地	③ ④
134	1995	1	津島北	AW~AX11~12	事	福利厚生施設北棟 (津島岡大第13次調査)	7.10~10.4	816	縄文後期のピット 弥 生時代の水田址 弥生~古墳の溝	③ ④
144	1995	2	津島南	BB~BC12~13	事	福利厚生施設南棟 (津島岡大第14次調査)	10.25~2.14	856	弥生時代の水田 弥 生~古墳時代の溝・上 坑	③ ④
147	1995	3	津島北	AW00~01	サ	サテライトベンチャ... ビジネスラボラトリ 新営 (津島岡大第15次調査)	'95.1.16~4.25	1600	縄文後期の貯蔵穴・堅 穴住居・掘・ピット・ 土坑・河道 弥生早期 の貯蔵穴・河道 弥生 時代の水田・溝	③
147	1996	4	津島北	AW00~01	サ	サテライトベンチャー ビジネスラボラトリ 新営 (津島岡大第15次調査)	4.1~4.24	1600	調査面積6600m ² (縄文 時代については1600m ²) 弥生時代の水田・溝 弥生早期貯蔵穴・縄文 後期貯蔵穴・堅穴住居 ・掘・ピット群・土坑	③
153	1996	2	津島南	B019~20	農 ・ 茶	動物実験棟新営 (津島岡大第16次調査)	5.7~15	30.3	調査面積30.3m ² A地 点:縄文時代と古墳時 代の土坑。B地点:中 世の溝、古代の柱穴列。 弥生時代の水田	③
154	1996	3	津島北	AW02~04	環	環境理工学部新営 (津島岡大第17次調査)	'96.5.21~'97.1.9	1451	調査面積1451m ² 古代 の水田、弥生時代の溝、 水田、縄文時代後期の 住居址・ピット群・土坑	③

附表

附表2-(2) 試掘調査

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所持	調査名	調査深度	造成土厚	概要	文献
4	1983	1	津島南	BH13	農	合併処理槽予定地	2.5		弥生・前期土器片(‘83年度発掘)	①
5	1983	2	津島南	BP17	農	排水管中間ポンプ槽予定地	3.5			②
8	1983	3	津島南	BB~BG14 BB-BE15 BE18 BP16~18	農	排水管埋設予定地	2.0		弥生・前期土器片(‘83年度発掘)	③
11	1983	8	津島北	AW05	T.	校舎新設予定地	3.0	1.0	土器片出土	①
12	1983	5	津島南	BC-BD15	事	人学事務局新設予定地	2.0~3.0	0.9	土器片出土	①
13	1983	6	津島南	BB10	保	保健管理センター新設予定地	2.0~3.0	0.8	酒蔵出	①
14	1983	4	津島南	BP22-23	農	農場合宿新設予定地	2.0~3.0	0.6	土器片出土(‘87年度工事立会)	①
15	1983	7	津島南	BI16	事	津島宿舎新設予定地	2.0	0.9	土器片出土(‘87年度工事立会)	①
21	1984	1	鹿 田	BU30-31	医病	西病棟北側受水槽予定地	1.4	0.5~0.7	中世土器・包含層確認(廃土保存)	②
22	1984	2	鹿 田	CT-CU25 CZ19-20-23-24	医病	医療短期大学部校舎新設予定地	2.7	0.8~1.0	中世・古代の遺物出土(‘86年度発掘調査)	③
23	1985	3	津島北	AV-AW99~01	学生	男子学生寮新設予定地	2.0~3.0	1.0	織文~中世の遺構・遺物(‘88年度発掘調査)	④
24	1985	2	津島北	AX02	教育	研究棟新設予定地	2.6~3.4	1.2	織文~弥生時代の土器出土	⑤
25	1985	1	津島南	BE08	教養	講義棟予定地	3.5	1.2	遺構・遺物未確認(‘86年度工事立会)	⑥
29	1985	4	鹿 田	AJ33 AJ40 AJ-AK26	医病	外来診療棟西側整備工事に先立つ範囲確認調査	2.2~3.0	0.9~1.4	弥生~中世の遺物	⑤
35	1986	3	津島南	BF-BG09	学生	屋内運動場新設予定地	2.4 1.2~1.7	1.1	弥生前期の溝・中世河道検出(‘88年度発掘調査)	⑥
37	1986	4	津島北	AY-AZ07	人自	自然科学研究棟新設予定地	1.6~3.2	0.6~0.8	織文中期末~後期の遺構・遺物(‘88年度発掘調査)	⑥
45	1987	4	上 生	AP02	事	外国人宿舎建設予定地	2.2~2.8		近世・弥生・織文の遺構面確認	⑧
46	1987	5	津島北	AV11	情	総合情報処理センター新設予定地	2.0~3.0	2.0	黒色土を標高2.2m前後で確認(‘93年度発掘調査)	⑨
48	1987	6	津島北	AY09	施	身体障害者用エレベーター・建設予定地	3.0~3.5	約1	近世・中世の遺物 中世・古代の本田址(継続して発掘調査に及ぶ)	⑧

附表

総合番号	年度	番号	道路名	調査地区	所属	調査者名	掘削深度	造成土厚	機会	文献
49-1987	7	津島市	BD09	教基	身体障害者用エレベーター建設予定地		2.5	0.7	縄文時代土坑群を確認 縄文・中世・近世の土器出土（継続して発掘調査に及ぶ）	⑧
61	1988	17	津島北	AX04-06 AX04	工	校舎建設予定地	2.0~3.5		黒色土を標高3.3m前で確認 溝状遺構・水田址検出 縄文～近世の土器出土（1988年度）	⑪
62	1988	19	津島南	BD18-19	農業	動物実験飼育施設及び遺伝子実験施設	2.3	1.1~1.2	黒色土を標高約2.3mで確認 溝状遺構・縄文～中世の遺物検出	⑪
63	1988;20		津島市	BC29	事	国際交流会館	2.5	1.2	近世・中世の遺物出土（1988年度工事立会）	⑪
77	1989	3	津島北	AZ17	大自	合併処理槽設置予定地	4	1.0~2.0	中世～明治の水田跡・溝（1989年度工事立会）	⑫
78	1989	4	津島南	BD02	学生	学生合宿所予定地	2.0~3.2	1.0	弥生早期～前期の駐跡（1989年度工事立会）	⑫
79	1989	2	津島北	AZ-BN05	教育	身体障害者用エレベーター	2.5	0.8	縄文時代後～弥生早期の落込み・縄文時代後期～中世の土器片（小規模発掘、面積38.5m ² ）	⑬
83	1989	5	津島北	AV-AW13	図	図書館新館予定地	3	1.4~1.6	古代水田・弥生～古代の溝（1993～94年度発掘調査）	⑭
87	1990	3	津島南	BC02	学生	学生合宿所ポンプ池予定地	2.5	1.1	弥生時代前期の駐跡 中世の土器片	⑮
89	1990	4	倉敷地区		資生	資源生物科学研究所遺跡確認調査	2.5	0.7	中世後半以前の土器片	⑯
90	1990	5	龜山	BY-BZ68	ア	アイソトープ総合センター予定地	2.3	1.2~1.3	中世土師質土器など（1990・91年度発掘調査）	⑰
91	1990	6	津島北	AW-AX11	事	福利厚生施設予定地	3.9	1.4~1.6	弥生～古墳時代の溝、中世土器小片	⑯
121	1993	3	津島南	BE～BF～22～23	農	農学部附属耕地実験施設	1.5		近世～中世の耕土	⑩
136	1994	3	津島南	BD20	農業	動物実験施設	2.0	0.9	GL-1.4mで黒色土：縄文土器一点出土	⑯
140	1995	4	津島南	BE26	事	国際交流会館新館予定地	4.1 2.4	1.6	近代の耕地	⑯
146	1995	5	津島北	AW02-03	環	環境理工学部新館	2.4	1.2	標高3.2mで黒色土を確認 弥生の溝状遺構検出	⑯
150	1995	6	津島南	BP07	学生	ボクシング部ボックス新設工事	2.8	1.2	標高約2.5mで黒色土確認 古代・古墳・弥生の溝を検出	⑯

附表

附表2-(3) 立会調査

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	掘削深度	造成土厚	概要	文献
1	1983	13	東山		教育	附属中学校新宮	4.0~5.0		シルト層中	①
6	1983	23	鹿田	AO~AW22	医病	外来診療棟及配管埋設	1.3		弥生後期土器(分離形土製品)貝集積	②
7	1983	24	津島南	BC~BP18	薬	周辺排水用集中體理設	2.5			③
7	1983	24	津島南	BC~BP18	業	水道管埋設	1.5			④
9	1983	25	津島北	BA13	事	西門施設改修	2.6			⑤
16	1984	10	津島北	AW-AK11 AZ-BA12-13	情	総合清掃処理センター通 信用管路埋設	0.7~1.4	0.9~1.2		⑥
17	1984	15	鹿田	BB29	医病	看護婦宿泊用木造管修繕	2.0	1.15	中世包含層確認 中世・ 弥生土器	⑦
18	1984	17	津島南	B116	事	非常勤講師宿泊施設新宮	1.6	1.0		⑧
19	1984	20	津島南	B115	事	南宿舎合併修理換取付	2.0			⑨
20	1984	20	津島南	B115~17	事	南宿舎合併修理換取付配 水管管理設	1.0~2.2	1.0	溝・土壤取出 水槽器・ 弥生土器	⑩
26	1985	6	鹿田	AW~BH23 BH-B124	医病	外来診療棟外壁排水 管埋設	1.3~1.7	0.7~1.3	中世・弥生の遺構・遺物 を確認	⑪
27	1985	13	鹿田	AK~AM43~ 46 AO~AT42他	医	基幹環境整備排水その 他工事	1.0	0.8	近世土器発見検出	⑫
28	1985	14	津島北	AV06-07	工	三次元棟新設及び排水管 埋設	1.5~1.7	1.0~1.5	土器細片出土	⑬
30	1985	12	鹿田	AG31 AG24 AF23	次病	基幹環境整備绿化工事 電気配線ハンドホール掘 削	1.2~1.7	0.9~1.3	中世包含層・ピット	⑭
32	1986	9	鹿田	B1~BN45	医	排水・污水管改修	0.8~1.3	0.8		⑮
33	1986	12	津島南	BE08-09	教養	校舎新宮	2.3	1.3	中世の溝・土器	⑯
34	1986	13	鹿田	CL~CW28	医病	校舎新宮設備	0.5~1.2	0.8~0.9		⑯
39	1986	20	津島北	AV16-17	文	グラウンド改修	3.5	1.5		⑰
40	1986	21	津島南	BG08	学生	ハンドボールコート新設	0.2~2.0	0.8	黒色土確認	⑱
41	1986	22	津島北	AX16	文	動物実験室新宮	0.95		造成上内	⑲
42	1986	24	鹿田	CL~CR12 CR~CX13 CX~DA14	医	護岸及び防護工事	2.0	0.8~1.0	中世包含層	⑳
43	1986	26	津島南	BF07-08	教養	校舎新宮に伴う電気配管	1.8	0.9		㉑
44	1987	8	鹿田	BC37	医病	管路接新宮に伴う基礎杭 確認	2.5		弥生時代包含層・遺構確 認	㉒
47	1987	10	津島北	AY09	理	身体障害者用エレベー ター設置に伴う污水管移 設	1.2~1.6	1.0m前後		㉓
50	1987	4	土生	AQ02-03	事	土生宿外部排水管改修	0.7	0.6		㉔

附表

総合 番号	年度 年号	地名	調査地区	所蔵	調査名稱	掘削深度	造成土厚	概要	文献
51	1987	津島北	AM02	学生	馬場東新水管修理	2.0	0.96	谷部分	⑧
53	1987	津島南	BF22-23	農	農場施設新設その他工事	1.8	1.25		⑧
55	1987	鹿 田	CW14-17	火薬	校舎新設配管	1.3	1.16	中世木柱倒	⑧
56	1987	津島南	BG22	農	農場施設新設合併処理槽	3.6	1.2		⑧
57	1987	津島南	BF17~21	農	農場施設新設電気	0.7~1.5	1.2		⑧
58	1987	津島南	BF22	農	農場施設新設給排水	3.0	1.3		⑧
59	1987	鹿 田	CH-C156-57	医	動物実験施設焼却炉	0.3~1.2	0.8		⑧
60	1988	津島北	AY11-AZ11	情	情報処理センター通信線 付設	1.2	0.8~0.85		⑨
61	1988	津島北	AZ06	大自	大学院新館に伴う電柱架設	2.3	0.8		⑩
66	1988	津島南	BF-BG10-11	教育	テニスコート夜間照明施設	2.2 1.4~1.5	1.5	黒色土を表土下約2mで 確認 西に向かう落ちが 堆出される	⑩
68	1988	津島南	BB25-26	事	国際交流会館 宮柱架設	1.7~1.9	1	以下は灰色粘土	⑪
69	1988	津島南	BC26	事	国際交流会館 本体部分	1.0 2.4~2.9	1.5		⑪
71	1988	津島南	BB26	事	国際交流会館 合併処理槽	2.2	1.3		⑫
72	1988	津島北	AU09-10	T.	機械工学科・精密応用科 学科 実験棟電気改修	1.4~1.6	1.4		⑬
73	1989	津島北	AZ09 BA-BB09	大自	自然科学研究科棟新設 宮柱架設	1.8~2.2	1		⑭
74	1989	津島北	AZ08	大自	自然科学研究科棟新設 工事用道路	1.4		弥生後期水田 近世耕稼 山	⑫
75	1989	津島北	AL04-05	工	生物応用工学科棟新設 電柱架設	1.5~1.9	0.7~1.2		⑪
76	1989	津島北	AV06	T.	情報工学科地下部分掘削	6.0		標高-0.5mまで掘削 無遺物	⑯
80	1989	鹿 田	CE30-37-44 CJ-CM45 CL28-29	医病	旧管理棟跡地環境整備	1.2~1.5	0.7~1.0	中世層確認 外灯基礎掘削	⑩
81	1989	津島北	AY17	大自	合併処理槽 地質調査	2.3	2		⑯
82	1989	津島南	BC02		市道扒掘特許工事 学生 合宿所新設	1.2	1.2		⑩
84	1989	津島北	AY17	大自	合併処理槽 本体部分掘削	3.0		〈1989年度試掘調査〉	⑯
85	1990	津島北	AV04~10		岡山市道本町津島東線拡幅 に伴う補償工事Ⅰ 電柱移設	0.4~3.0	0.6~1.4	黒色土層 条里溝?	⑯

附表

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	掘削深度	造成土層	概要	文献
85	1990	10 11	津島北	BD03～04	教委	グラウンドシャワー空新宮	1.2～1.5	0.9～1.2	条革名残?	◎
88	1990	20	津島北	BC02～04 BD03～04		岡山市道木町津島東線鉄軸に伴う補償工事 I 学生会館所蔵排水管設置	2.3	1.2	GL～2.3mで黒色土層	◎
93	1990	36	津島南	BR14	市	事務局敷地内排水溝修繕	0.3～1.5	0.8		◎
94	1990	37	津島北	AV01～03 AT03		岡山市道木町津島東線鉄軸に伴う補償工事 II	0.7～1.5	0.7～0.8	東端で条革の名残?	◎
95	1991	9	津島南	BC18	遺	防火用水槽古	2.0	0.8	以下基盤層まで遺物出土	◎
97	1991	14	津島南	BB18	事	津島地区基幹整備(電気)配管	0.7		GL～0.5mで明治層上面	◎
98	1991	21	鹿田	CT44	医	水道管破裂	0.9	0.9	近世層上面まで	◎
99	1991	17	津島南	BB16	事	津島地区基幹整備(電気) ハンダホール・アース板	1.7～1.8	0.5	明治層～淡灰色粘土層	◎
100	1991	16	津島	AV08～09 AX12 AW AY05 BF16	市	津島地区基幹整備(電気) ハンダホール	1.1～1.3	1.0前後	近世層上面	◎
101	1991	19	津島北	BD15	事	津島地区基幹整備(電気) アース板埋設	1.7	1.0	GL～1.5mで黒色土上面	◎
102	1991	40	津島南	BC-BE-HF12	事	南北道路街灯設置	1.5		GL 1.4mで古代層確認	◎
103	1991	35	鹿田	BK～BX43～54	医	医学部基幹整備 水銀灯設置	1.0～1.5		GL～1.0mで近世層上面、-1.3mで中世層	◎
105	1992	15	津島南	BD18～19	遺	遺伝子実験施設ハンダホール設置	0.7～1.5		GL 0.75m～1.1mで明治層上面、織文後期層まで2本検出	◎
106	1992	25	津島南	BC12	事	仮設電柱設置	1.2		GL～1.1mで明治層上面	◎
107	1992	28	鹿田	BU65 BU～BC66 BC67～72 BW-CAT1	ア	アイソトープセンター渠水槽・ヒューム管設置	1.4～1.5		GL～0.9mで明治層上面、中世層1本	◎
109	1992	33	津島北	AV09	工	ボイラー系給水管改修工事	1.2		GL～1.1mで明治層上面	◎
110	1992	34	津島北	AV12	事	附属図書館北側駐車場整備	3.0	1.7	造成上以下粘土層	◎
111	1992	37	津島南	BB-BD-BE12	事	下水道事業に関する地質調査	1.1～1.5	1.1～1.4	明治層まで	◎
112	1992	40	鹿田	CCT4～C172	医	動物実験施設西側基礎整備	1.1～1.3	1.1	近世層?まで	◎
113	1992	41	鹿田	C173	医	テニスコート脇電柱埋設	1.2	1.0	古代土器1点	◎
114	1993	6	津島北	AU10	埋文	沈殿層設置	0.85	0.85	灰褐色粘土層上面	◎
116	1993	13	津島北	AV04	工	牛体機能応用工学科棟外構工事	0.5～1.0	0.7～0.8	明治層・近世層確認	◎

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	掘削深度	造成土厚	概要	文献
117	1993	14	津島北	AZ03	教	電柱埋設	1.0	0.6~1.0	明治層まで	④
118	1993	17	津島南	BB~BC10~12	保	保健管理センター・新宮に伴う外構工事ほか 電気配線	1.8	0.6~0.7	明治層以下保健管理センター本調査と同じ層序、黒褐色土は-1.15~1.7m、その直下に基盤層	④
119	1993	23	津島北	BA07	市	津島地区基幹整備 R1 共同利用施設排水処理施設施設設置	3.2		明治~中世層 暗褐色土層 層認 古代窯？ 織文陶器？の土器片1	④
120	1993	28	津島南	BD~BE13	市	津島地区環境整備 南北道路沿水路ボックスカルバート敷設	1.5	1.0	明治層。近世へ中世層を確認	④
122	1993	39	津島南	BB05~07 BC05 BC41	学生	野球場バックネット他改修	2.0~3.2	1.0	GL~1.2~2.0m付近で黒色土を確認 以下は黄色砂~青灰色粘土	④
123	1993	48	津島南	BC11	保	保健管理センター新宮に伴う外構工事ほか 電柱設置	1.2	0.8	明治層・近世層確認	④
124	1993	48	津島南	BB~BG-12~13	事	津島地区環境整備 水銀灯設置	1.8	0.5~1.2	明治層 以下近世~中世層一部で暗褐色土層を確認	④
125	1993	49	津島南	BB11	保	保健管理センター新宮に伴う外構工事ほか 旧棟改修	1.1	0.8	明治層確認 幼生土器片	④
126	1993	54	津島南	BD~BE-12~13	事	津島地区環境整備 信号機設置	1.6	1.0	明治層 以下近世~中世層一部で暗褐色土層	④
128	1993	46	鹿田	DC68~75	医	テニスコートブロック床他改修	0.9~1.0	0.8~0.9	明治層確認	④
129	1994	5	鹿田	DB60~62	医	護岸改修工事	1.5	0.8	造成土以下明治~近世層？各一層、以下はすべて遺構埋土の可能性あり。算3条、ピット9確認	④
130	1994	7	津島北	AV11	情	総合情報処理センター工事用ストラップ設置	1.2	1.2	明治層上面まで	④
131	1994	9	津島南	BD~BE~BF-04~07	事	陸上競技場照明灯設置	2.0	0.96	黒明ボール（径80cm、深さ10m）オーガー掘削、GL~1.92~2.0mで黒色土確認	④
132	1994	12	津島北	AW07	工	電気電子機器精密応用化学校外構（ハンドホール）	1.45	1.2	近世層まで	④
133	1994	13	津島北	AV10 AW10 AU11	情	総合情報処理センター新設電気工事	2.2	1.5	明治1面、近世2面、中世（近世か？）1面、近世の磚確認。GL 1.7mで黒色土確認	④

附表

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所属	調査名称	掘削深度	造成土厚	概要	文献	
135	1994	18	津島北	AZ08	理	理学部ヘリウム液化装置 ・改修その他工事	1.3	1.0	造成土以下、黄褐色土、 灰褐色粘質土層確認。遺物なし	⑩	
137	1994	20	津島南	BD20	農	焼却場	2.2	1.5	GL-1.9mで黒色土確認	⑪	
138	1994	21	津島北	AU03～AV05	事	地域学習センター改修電 気工事(ハンドホール)	1.1	1.1	明治層上面まで	⑫	
139	1995	9	津島南	BB12	事	南福利厚生施設予定地樹 木移植	1.5	0.5	明治層以下5層鑑別。遺 物なし	⑬	
141	1995	11	鹿 山	BF17-18	医病	鹿出地区基幹整備 附属病院支路新設	1.5	1.0	造成土以下茶褐色土、青 灰色粘質土層確認。遺物 なし	⑭	
142	1995	12	津島北	AU14	國	因幡駅新宮に伴う仮設電 柱設置	1.7	1.5	明治層まで	⑯	
143	1995	13	鹿 山	CB71-72	ア	鹿山地区基幹整備 ソーブル融合センター 焼却研究標柵管移設	0.8	1.0	0.6	造成土以下暗褐色砂質土	⑰
145	1995	14	鹿 田	CD07-08	医病	鹿田地区基幹整備 液酸タンク設置工事	2.3	1.0	中世遺構面2面、溝3条 確認。溝内から古代・中 世土器出土	⑲	
148	1995	17	鹿 田	CC-0008～ 10	医病	鹿田地区基幹整備 附属病院液酸タンク設 置工事	1.2	0.85	包含層確認。中世の土器 片採集	⑳	
149	1995	23	鹿 山	DF56～67	医	防球ネット取設工事	3.0	0.8	GL-2 m以下が旧河道か。 上層片、石器採集	㉑	
151	1995	24	津島南	BD19, BB～ BD20	農業	動物実験棟新宮に伴う電 柱設置	1.4	1.1	明治～近世層まで掘削	㉒	
152	1996	4	津島南	BC18	農業	動物実験棟新宮に伴う造 成土取り	0.86	0.5	黒色土層付近まで掘削	㉓	
155	1996	5	津島南	BD16～19	農業	動物実験棟新宮に伴うハ ンドホール設置工事	1.3		造成土以下5層確認	㉔	
156	1996	6	津島北	AX03～AY03	サ	サテライトベンチャービ ジネスラボラトリー新宮 ガス管設置工事	1.0	0.65～ 0.75	明治層・近世層確認	㉕	
157	1996	7	津島南	BC18～20	農業	動物実験棟新宮に伴う構 木設置工事	1.2	0.83～1.1	明治～近世層まで掘削	㉖	
158	1996	9	津島北	AU06, AV06, AU00, AU01, AU02	サ	サテライトベンチャービ ジネスラボラトリー新宮 ハンドホール設置工事	1.0	1.0	明治層まで掘削	㉗	
159	1996	11	津島北	AU11, AV12, AW12	事	福利厚生施設北棟仮設電 柱設置工事	1.3	1.2	大半が造成土内までの掘 削。一部明治層を掘削	㉘	
160	1996	12	津島北	AV02, AV03, AV04, AV09, AW02, AW04	サ	サテライトベンチャービ ジネスラボラトリー新宮 外灯設置工事	1.0～1.5	0.76～1.1	明治層2面、近世層2面、 中世層？1面、弥生層？ 1面確認	㉙	

総合番号	年度	番号	遺跡名	調査地区	所調	調査名稱	掘削深度	着成土厚	概要	文献
161	1996	13	津島北	AW03～AW03	サ	サテライトベンチャービジネスラボラトリ－新宮 橋・配管設置工事	2	0.95	弥生層まで掘削。古墳時代前期の遺構、遺物確認	④
162	1996	14	津島南	E019	農業	動物実験棟新宮外灯設置工事	1.2	1.2	明治層上面まで掘削	④
163	1996	15	津島南	E019	農業	動物実験棟新宮ガス工事	0.9	0.8	明治層まで掘削	④
164	1996	18	津島北	AW03	環	環境理工学部新宮予定地電柱移設工事	2.0		黒色土まで掘削	④
165	1996	19	津島北	All～AW17	文法	山道岸辺中1号線道路改修工事				④
		b				試掘調査	2.65	1.15	3ヶ所試掘（岡山市文化課による試掘を見学）	④
		c				防球ネットポール移設工事	3		径40cmのオーバーで13ヶ所掘削	④
166	1996	20	津島北	AY～AY14	図	附属図書館新宮ガス管設置工事	1.1	1.1	明治層上面まで掘削	④
167	1996	21	津島北	AV13	図	附属図書館新宮電気設備工事	1.3	1.2	明治層を若干掘削	④
168	1996	24	津島北	AY14, AV13, AY14, AV13, AU08	図	附属図書館新宮電気設備工事・外灯	1.4	1.4	明治層上面まで掘削	④
169	1996	25	津島北	AV13	図	附属図書館新宮雨木脚・外構工事	1.3	1.03	造成土以下、青灰色粘質土、黄褐色粘質土、灰褐色粘質土を確認	④
170	1996	29	津島北	AW～AX11-12	事	福利厚生施設北棟新宮外構工事	1.4	1.2	近世層まで掘削	④
171	1996	31	津島北		事	福利厚生施設北棟ガス管埋設工事	1.72	1.0	近世層まで掘削	④
172	1996	36	上生	上生	事	上牛宿合駄輪場設置工事	0.7	0.5～0.6	近世の水田を確認	④

※発掘調査・試掘調査については全てを、立会調査については主要なもののみを対象としている。

文献番号は附表3・4に対応する。

附表

附表3 埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名 称	発行年月日
①	岡山大学構内遺跡調査研究年報1 1983年度	1985年2月28日
②	岡山大学構内遺跡調査研究年報2 1984年度	1985年3月30日
③	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集	1985年5月7日
④	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告Ⅱ(農学部構内BH13区 他) 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第2冊	1986年3月31日
⑤	岡山大学構内遺跡調査研究年報3 1985年度	1987年3月31日
⑥	岡山大学構内遺跡調査研究年報4 1986年度	1987年10月31日

附表4 埋蔵文化財調査研究センター刊行物

番号	名 称	発行年月日
⑦	鹿田遺跡Ⅰ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊	1988年3月31日
⑧	岡山大学構内遺跡調査研究年報5 1987年度	1988年10月31日
⑨	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第1号	1988年10月
⑩	鹿田遺跡Ⅱ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊	1990年3月31日
⑪	岡山大学構内遺跡調査研究年報6 1988年度	1989年10月14日
⑫	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第2号	1989年8月
⑬	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第3号	1990年2月
⑭	岡山大学構内遺跡調査研究年報7 1989年度	1990年11月20日
⑮	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第4号	1990年7月
⑯	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第5号	1991年3月
⑰	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第6号	1991年8月
⑱	岡山大学構内遺跡調査研究年報8 1990年度	1991年12月10日
⑲	津島岡大遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊	1992年3月31日
⑳	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第7号	1992年3月
㉑	岡山大学構内遺跡調査研究年報9 1991年度	1992年12月21日
㉒	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第8号	1992年8月
㉓	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第9号	1993年3月

番号	名 称	発行年月日
⑨	鹿田遺跡 3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第6冊	1993年3月31日
⑩	岡山大学構内遺跡調査研究年報10 1992年度	1993年12月20日
⑪	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第10号	1993年11月
⑫	津島岡大遺跡 4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第7冊	1994年3月31日
⑬	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第11号	1994年3月
⑭	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第12号	1994年10月
⑮	岡山大学構内遺跡調査研究年報11 1993年度	1995年2月28日
⑯	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第13号	1995年3月
⑰	津島岡大遺跡 5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第8冊	1995年3月31日
⑱	岡山大学構内遺跡調査研究年報12 1994年度	1995年12月28日
⑲	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第14号	1995年10月
⑳	津島岡大遺跡 6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第9冊	1995年12月30日
㉑	津島岡大遺跡 7 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第10冊	1996年2月29日
㉒	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第15号	1996年3月
㉓	岡山大学構内遺跡調査研究年報13 1995年度	1996年10月22日
㉔	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第16号	1996年10月
㉕	鹿田遺跡 4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第11冊	1997年3月31日
㉖	津島岡大遺跡 8 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第12冊	1997年3月31日
㉗	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第17号	1997年3月
㉘	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第18号	1997年9月
㉙	岡山大学構内遺跡調査研究年報14 1996年度	1997年11月30日
㉚	今よみがえる古代 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月8日
㉛	津島岡大遺跡 9 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊	1997年12月20日
㉜	津島岡大遺跡10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第14冊	1998年3月30日
㉝	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第19号	1998年3月

1996年度までの調査地点

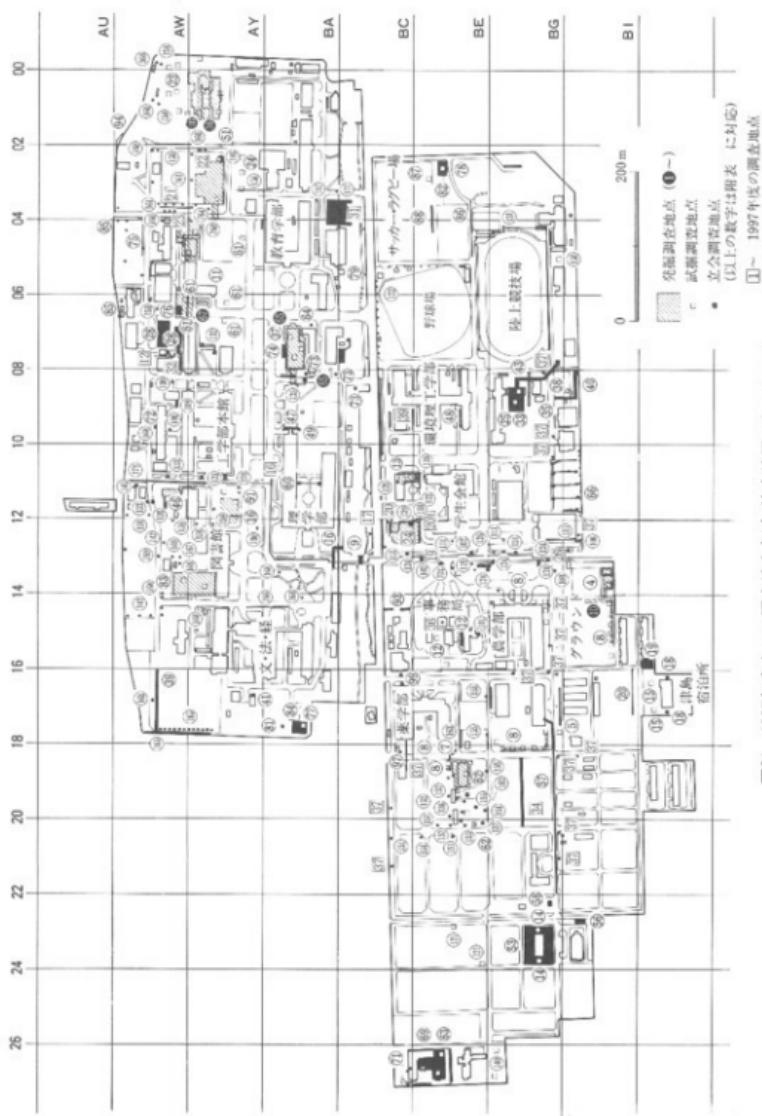


図21 1997年度までの調査地点(1) 津島地区 (縮尺1/7,500)

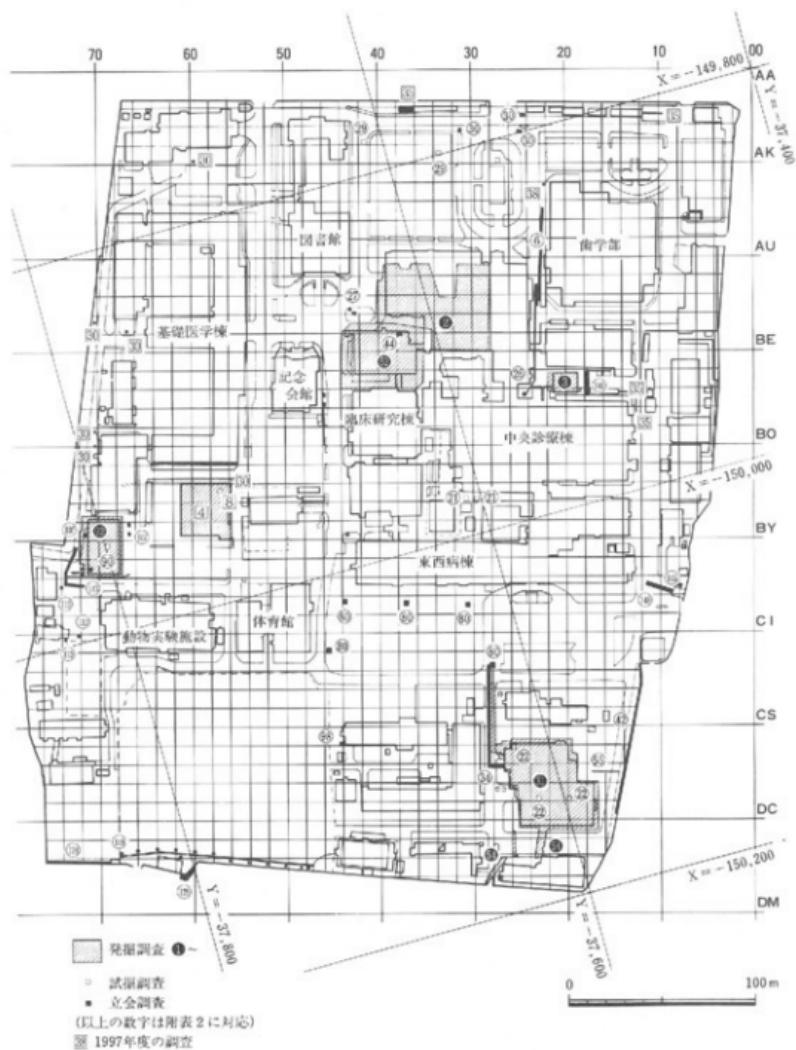


図22 1997年度までの調査地点(2) 鹿田地区 (縮尺1/3,000)

別編

講演記録

本センターは1997年11月26日に設置後10年を迎えることを記念して1997年11月8日に講演会並びに遺跡見学会を催した。

講演会は新納泉センター調査研究室長の司会のもと、小坂二度見学長による開会挨拶のもち、稻田孝司センター長に『縄文時代のくらし—ドングリ穴と落し穴—』、狩野久文学部教授に『「津島」の地名の由来』と題する講演を頂いた。本稿は狩野教授の講演を記録したものである。

「津島」の地名の由来

岡山大学文学部教授 狩野 久

私の話は地面の上の話です。津島遺跡の名前の由来となっておりますが、津島の地名がどういう意味を持った地名なのかということを今日はお話しさせていただこうと思っているわけであります。私も実は津島中に住んでおりますが、津島というところは「津島京町」もあれば「津島東町」もあれば「津島…」というのもありますて、津島の下の地名が10もある大変大きな地名であります。江戸時代には津島村といいました。この地名の意味を少し考えてみたいと思うわけであります。

地名といいますのはみなさんもご存じの通り、いろんな事情で付けられるわけです。物の本によりますと地名にはまず人文的な地名というものがあります。人文的な地名というのは例えば人間がそこに住んでいたことに関連して人間の生活活動に応じて付けられたような地名、田圃を開く「犁田」という地名、あるいは人間が通る道沿いには「追分」なんて地名が日本全国あちこちにございますけれどもそういう人間の生活活動に関連したような地名です。時代もいろいろ重なっております。古い時代の地名だけではなくて、岡山の町のなかには岡山の城下に関連する地名というのがずいぶんたくさんございますね。弓ノ町、細屋町とか、そういう職人たちが住んでいたことに関連して付けられている町の名前というものもあります。このように、人間の生産活動、生活活動に関連して付けられた地名というのは一つの大きな地名の分類項目であります。もう一つは自然地名といって、自然の山や平地等々の自然の地形、地物に基づいて付けられた地名。これもずいぶんたくさんございます。「…原」というのはずいぶんたくさんあります。自然地名というのも一方の極にたくさんございます。そういう地名が古い時代から新しい時代まで層を成して今日の地名を形成しているわけであります。そういう地名の研究も日本でもよくやられているわけです。地名学研究所」というのも民間で奈良県にございますが、そういうところの方がいろいろとやっておられるのですけれども、まだ日本では地名の

研究は遅れていると思います。ヨーロッパや韓国、中国でもそうなんですが、国立大学の中に地名の講座がいくつもあるそうなんです。地名言語学というような学問分野まであると伺っておりまして、そういう点では日本の地名研究というのはそんなに進んでいない。しかしいろんなことが分かってきています。さてその地名がいつ頃から生まれただろうか、発生ただろうか。地名が文字で表現される時代はいつから始まったのか。これは地名に限らず、人名、その他の表現も含めて文字を使いだした段階以降の話でありまして、これがいつ頃から始まったのかはよく分かりません。最近熊本県で木の甲の留め具の裏側に文字らしいものがある。それはどうも4世紀くらいの遺跡から出てきた。そんな時代にそんな所で文字を使っていたのだろうか、私もそんなことに関わっていて呼び出されまして拝見してきましたけれども、文字のような、文字でないような、田園の「田」の字であるようなそうでないような字が書いてありました。

『魏志倭人伝』によりますと、日本から中国に行った使いが倭の卑弥呼の手紙を持っていったと言うことになっておりますから、ともかくそういうものを書いて持っていました。ですから文字を書く人は卑弥呼のそばにいたことは間違いない。しかし、その程度であったと思うんですね。それ以上に文字を書く人がたくさんいたとは思えない。今現在分かっております文字を使っている実例で申しますと、和歌山県の隅田八幡神社の鏡の銘文に文字が書いてある。その中に地名が出てくる。「意柴沙加宮」(おしさかのみや)という地名。ご存じのように日本人は中国から漢字を受け入れて文字を使い始めました。中国の文章の表現法は日本語と違いまして、文語、述語、目的語という配置ですね。中国語は英語と同じ表現法であります。そういういわゆる漢文そのものを使うということも勉強しましたけども、それだけでは日本語を表現することはできない。特に固有名詞はどうにもならないわけでありますから、そういうものについては漢字の音を借りて日本語を表現しました。それがいわゆる万葉仮名といわれるものです。奈良時代の万葉集はそういうもので歌を表現しているのであります。「意柴沙加」も漢字の音を借りて地名を表しているわけです。オシサカというのは大和の地名であります、後には「忍坂」というように表します。これは現在確認されている遺例で漢字を借りて地名を表現する最初の例です。443年というのが隅田八幡の鏡の比定されている年代ですが、下支の年号しか書いてないものですから60年先か、60年後かというふうな議論がありましてなかなか決まらないんですけども、今一応443年ということになっております。その次に古く表現されている例としては例の埼玉県の稻荷山鉄劍、稻荷山古墳から出土した鉄劍の銘文にやっぱり地名があります、それは「斯鬼」(しき)という地名であります。これも大和の地名でありますけれどもこんな字を借りて表現しております。古い時代の地名の表記の例としまして、これは471年のものです。このようにして地名の表記が行われてきました。

さて、資料1をご覧ください。そこに『和名抄』という本から備前国の地名を掲げておきました。『和名抄』というのはご存じの通り、10世紀、930年代に作られた漢和辞書であります。日本最古の漢和辞書であります。漢和辞書である

と同時に百科辞書みたいなものであります。源順という人が作った本でありますが、この本に「国郡之部」というのがありますて、日本全国の国郡の名前がこんな風にして挙がっているわけであります。今ここに掲げましたものは江戸時代に印刷された本から取ったものであります。それをちょっと見ていただきますと、これはもう皆さんおなじみの地名がたくさんあるわけであります。郡名が和気郡から上道郡までございますが、例えば邑久郡、今の邑久町から長船、牛窓にかけての地名であります、「邑久」というのは今日まで地名が残っているわけですね。「鞠負」、「土篠」、「須恵」、「長沼」、「尾沼」、「尾張」、「杯梨」、「石上」、「服部」、これらはほとんどあの近辺に大字の名として地名が残っています。それは別に邑久郡に限りませんで、今問題のこの地域の御野郡をご覧頂きますと、これも全部残っていますね。「枚石」、「廣世」、「出石」、「御野」、「伊福」、「津島」、これみんな残っていますね。伊島というのは伊福と津島を合わせた地名だと思いますが、それでよろしいですか。こういう地名を合わせるときは大変民主的にやるものでありますて、どちらかの地名がそれを乗っ取るということがないんですね。そしてすべて漢字で二字で地名が書いてありますが、その下に割書で、万葉仮名で地名の読み方が書いてありますね。「廣世」は「比呂世」と下に書いてございます。これが『和名抄』の特徴でありますて、日本語としてはどう読むかということを全部示しているわけでありますて、たまたま無いところがございますが、これは要するにのちまで伝わらなかっただけであります。もともとはそういうように日本語の読み方を示しているわけであります。

地名の漢字表現法は、国の名前はもとよりありますけれども、郡の名前も、郷の名前も全部漢字二文字で表現していますね。一つの例外もない。今現在の地名も二字の表現が大部分です。これは朝鮮半島でもそうですし、中国でもそうです。地名というものは二字で表すものだというルールがあります、そのルールに従って日本でもある時期に二字の地名表記に変えたわけあります。それが資料2の『続日本紀』として掲げておる資料であります。和銅六年、西暦でいいますと713年、奈良に都が変わりましたのが710年でありますから、その3年後のこ

資料 1
「和名抄」 国郡之部

資料2

『続日本紀』和銅六年

五月甲子、畿内と七道との諸國の郡の名は、好き字を着けしむ。とあります。つまりの「その郡の内に生れる云々」というのは、「風土記」を作らせる記事なんです。その「風土記」を作らせた記事の前に今言いましたように郡・郷の名は好き字を付けよと言う命令を政府は出したわけです。ただ重要な点がこの記事には抜けています。どういう点かというと漢字二字で表すという内容が抜けている。二字の好字で表すというのがこのときの政府の正確な命令の内容なんです。漢字二字で地名を表すのはこのときからしたんです。その結果、どういうことが生まれたかと言いますと、大変地名の意味の分かりにくく、つまり表現されている漢字からは地名の意味がほとんど分からぬそういう地名が発生しました。それから地名の読みも非常にわかりにくくなりました。なにせ二字で何でもかんでも表現せにゃいかんということになったわけですから、当時の人は相当首をひねって考えたわけです。日本の地名には難読地名が多いといわれますが、それはここからはじまったのですね。

「遠敷」、遠いに敷くという字を書く地名はこれは福井県にご親戚がおられるか、あるいは福井県に住んでいたことがある方でないとまずこの地名は読めない地名であります。「おにゅう」と読むわけですね。「遠」という字は「おん」とも読みますね。親鸞・人遠忌というようなことを申しますね。仏教用語というのは古い音を伝えておりまして、奈良時代に唐の時代の音というものが伝えられてそれまでの呉音をやめるということにしたんですが、仏教用語にはそれが残ったのです。「敷」の字は古い読み方も新しい読み方も変わらず「ふ」でありますから、この「おん」と「ふ」を合わせると「おにゅう」となるのです。だけども読み方はこんな風に大変難しくなりましたし、意味もですね、遠いと敷くという字から意味を考えると大変な間違をしてしまう。遠くに敷物を敷くというような地名とは全く違います、これは元々は「小丹生」です。「丹生」という地名なら日本全国にたくさんあります。水銀朱の採れるところ、丹の採れるところという意味であります。「小丹生」の「小」という字はこれは上に着ける接頭語的な言葉ですから、そんなにたくさん丹は採れなかったのかもしれません。これがもともとの意味なんです。全國の地名はこういう風に表現されていたわけなんです。地名の読み方も難しくなりましたし、地名の意味も全然分からなくなってしまったわけですね。これではいけないとということで風土記を作らせて、地名の元々の意味はこうなんですよということを書かせたわけ

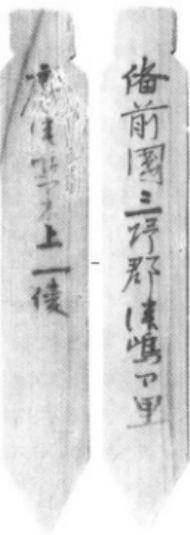
です。風土記を作らせた目的の一つはそこにあったんですね。もちろんその土地からどんなものが採れるかということも書かせました。しかし、残念ながらこの備前の國の風土記は残っておりませんし、若狭の國の風土記も残っておりませんのでこれから申し上げます津島の地名の意味というものが全く分からないままで今日までできたというわけであります。

そこで、津島の地名の意味をそういうことを前提にして考えてみたいわけであります。先ほどご紹介された新納さんは、津島という地名は、元々海辺が近くまできていたから、そういうことに基づく地名ではないか、と考えてきた、とおっしゃいました。そういうことにも津島の地名の意味は関係あるんですけども、これはどうもそういう地形・地物的な自然地名ではないんです。ということがこの資料3の木簡で明らかになりました。この平城宮木簡、今から15年ほど前に平城宮跡で出土した木簡であります。大きさは18cmぐらいであります。これをよんでみます。表と裏に書いてあります。右側が表で、左側が裏です。備前國、三野郡、この三野郡の「み」の字が「御」という字を使っていない。数字の「三」を使っている。和銅六年から地名にはいい字を避けなさいとしましたから、それから「御」の字を使いだしました。だからこれも以前の使い方なんです。それまではいろんな字を使っていました。漢字というのは同じ音でいろいろな字があるわけですから、いろいろな字を使ったわけです。三野郡を「三」の字で表すのは和銅六年よりも古いものですから、年紀は書いてないものでけれども、そういうふうに推定していいわけであります。そういう推定をさらに確かめますのが、問題の里名表記です。郡の次に里の名前があります。里というのは後には郷の名前でありますが、「津嶋^(ア)里」とあるわけですね。津島の「津」の字はちょっとくずした字になっています。さんざいなど棒を引っ張って書いています。島は今の簡単な島ではなくて、山が外にでるやつですね。部の字は「おおざと」をだんだん省略していくて「マ」のような字になっている。古いときはいかにもおおざとのような書き方なんですが、だんだん棒も短くなりまして、最後にはもう「マ」みたいになります。これは別に日本人が発明した略字ではなくて、中国に古くから先例がある。かなり古い時代にこの「マ」の使い方はあります。で、裏にいきます。ちょっと発掘するときに傷めてしまいまして肝心の所が少し読みにくいくらいありますけれども、上の字はまず「庸」という字で読んでよい、この字はご存じのように当時の租税制度で調庸というのがあります。調とか庸とかは地方の特産物を都に出すときの税の種類であります。庸とありますてその次は「津嶋^(ア)」なんです。その次の字がこれは「木上」と書いていますが、これは人の名前です。「津嶋^(ア)木上」、「津嶋^(ア)」が要するに名字で、「木上」がこの人の名前です。その次は「一俵」。俵です。これはここまで申し上げますと、そういうことかなとお気づきかと思いますが、津嶋^(ア)里の津嶋^(ア)木上という人が庸としてお米を、これは米と考えていいと思います。塩もあるんですけども、米でいい。米を一俵都へ運んだ。その時の俵にくっつけた、要する

に荷札なんです。

先ほど申し上げましたように三野郡の三野の字の書き方、それから津嶋^(ア)里という、津嶋郷を津嶋^(ア)里といふうに書く書き方、つまりこれはまだ二字で書く以前の書き方、そういうことから考えまして、和銅六年以前のものです。これは平城宮跡から出ていますから、平城宮に都が変わった和銅三年から、和銅六年までのものと考えていい。ですからこの米俵は平城宮を造ってまもなく、あるいは造りつあるときにこの備前國三野郡から徵用された人たちのお米として都に送られたものなんです。庸というのはそういう労役に従った人の食料であります。そういうものと考えていいわけであります。そういたしますと、津島という地名は自然地形的な自然地名のように一見見えますけども、津嶋部にもとづく地名であることがわかります。津嶋部というのは人間の名前で

あります。津嶋部を名乗る人がここに住んでいた、かなりたくさん住んでいた。一人、二人住んでいたのでは村の名前にはなりません。かなり集中して津嶋部を名乗る人が住んでいたことによりまして、ここの村の名前が付けられたわけです。津島はそういう人文地名だということになります。このような例は全国にたくさんございまして、「…部」を名乗った人たちに基づく地名はずいぶんたくさんあるわけです。岡山でも磐梨郡に物部というのがあります。邑久郡には服部、服、部と書く「はとり」というのがあります。赤坂郡には經部というのがあります。津高郡には健部があります。これは今の建部です。これらはいずれもたまたまとの部も二字なですからそのまま地名になっておりますが、津嶋部のように三字になって表現がはみ出るものは部を無くしてしまうか、あるいは「…べ」が入るような漢字になおしてしまうかします。例えばこういうのがあるんですね。岡山にもある真壁。真壁がやはり部を含む地名であります。これは元々は「真髪部」なんです。これを二字で表現しようとして苦労して壁の字を使ったわけですね。漢字二字でどう表現するかということでこういう字を使ったわけです。ですから「…部」に関わる地名というのは二字でそのまま表現されているものもありますし、こういう風に別の字を用いて二字で表現するものもありますし、津島のように部を除いて二字で表現するものもある。上道郡に「日下」と書いているものがあります。これは「日下部」なんです。「日下」は「くさかべ」と読むんじゃないですか。しかし漢字での表現は部を除いている。「津島」は「つしまべ」とは読みではいなかったかもしれません。ですから津島の地名は津



島部に基づく地名だと、まずそう考えていいということになりました。

それではその津島部とはなにかということになります。これは実はなかなか難しいものです。津島部はいわゆる部民です。そうしますと、津島部を管理・所有していた氏族がないといけない。たとえば大伴部だと、大伴連というものが中央の貴族でいるわけですね。それが所有している部民だということになるわけです。物部は物部連が所有していた部民、「…部」と称するのはそういう豪族、それも主として中央の豪族が所有するものがありました。津島はそれではどういう氏族を考えたらいいのか、いま、文献に残っている「つしま」を名乗る豪族は2つあるんです。一つは津島直です。この直（あたい）という姓は地方の豪族に与えられた姓である。特に国造という地方官を見る時に大和朝廷は地方におきますけども、この国造に与えた姓が「…直」であります。ですから直を名乗る豪族はたくさんいます。津島直はどこの豪族か。これは玄界灘に浮かぶ対馬の豪族です。対馬は後の律令国家になりますと二つの郡から成り立っています。上郡郡と下郡郡、巣原から美津島が下郡郡、その北の方に上郡郡といいます。ですから時代をさかのぼらせると、二人の国造がいたということになるんですが、そのいずれもが津島直を名乗っているんです。これが津島直です。津島連というのは、これは中間にいた豪族であります。大和の国に本拠地を持っている豪族であります。この津島連は後で出世をいたしまして、津島朝臣という姓をもらいました。朝臣といいますと貴族の仲間入りをしたような姓であります。津島朝臣は奈良時代から平安時代のはじめにかけて伊勢神宮の大宮司をやっておる氏族であります。彼らが独占しているわけではないですが、三～四人伊勢神宮の大宮司になっている人がいます。私ははじめ津島朝臣（連）と津島直は全く別の氏族かなと思っておりました。律令国家の宮廷祭祀というものは「神祇官」というのが東ねておりまして、これは太政官と並んで一つの大きな官僚機構を作っていたわけであります。神祇官は中臣氏と忌部氏という二つの氏族が中心になって伝統的に律令国家になりましたあとも実際の宮廷祭祀をやってるわけです。津島直も津島朝臣もその中臣氏にいずれも従っていた豪族であります。まずは津島直ですが、これが部民を所有することができるとなりますと、何らか大和朝廷との関係というものがなければなりません。対馬の豪族が独自に部民をもつということはまず考えられない。津島直は奈良時代になりましても神祇官の中である特別な任務に就いています。神祇官の中に「伯」「副」「祈」「史」という四等官がいますが、その下にいろんな専門職がいます。その専門職の一つに「ト部」がいるわけです。「ト部」は「占部」とも書きますが、津島の方はこのトの方を書く。つまり占いをすること専門職とするのがト部であります。このト部を構成する人が20人いる。20人のうち10人が津島直が率いる対馬の人をもって構成するということになっている。あと10人のうち、5人は奄岐の人、後の5人は静岡県の伊豆の人である。伊豆は伊豆半島ではなくて伊豆大島など、伊豆7島のほうの島民であります。かたや日本列島

の西の壱岐、対馬の人たちが、かたや東の伊豆の島々の人たちが宮廷祭祀に関わり、卜部という専門職になって宮廷に出かけてきているわけであります。卜部というのは何をするのかといふと、亀の甲の占いをするわけです。亀の甲羅を長方形に薄く削って、そこに小さな長方形の切り込みを入れてそれを焼くわけですね。焼いたものが表側にどういう裂け目で出てくるかということで吉凶を占うわけです。国の大事の場合、天皇がどこかに行幸するという場合、そういう様々な国の大事の際にこの卜部は活躍するわけであります。その卜部の半分を占めているのが津島直であります。この人たちは毎年対馬からはるばると瀬を伝って大和へやってくる。毎年やってくるのが大変だったわけで大和に住み着く人たちもだいぶ出てきた。あるいは都に住み着く人たちも出てきた。それを京卜部といっていた。この京卜部の中で出世したのが津島連ではないか、私はそのように想像しております。ですから津島直も津島連も根っこは同じです。そういう卜部の仕事をやりながら、宮廷祭祀に関わり合いながら、神祇官の中で出世していったのが津島連であり、そしてその中には伊勢神宮の大宮司にもなった人がいる。しかし律令国家はなぜかその京卜部は京卜部として認めながら、何人かは現地から必ず来ることを厳命しました。卜部が都に住んでいるうちに人術の靈感が消失することをきらったのかもしれません。この占いがいつから始まつたかということが問題なんですね。今は奈良時代の神祇官の話をしました。亀卜は律令国家になって初めて始まつたわけではありません。時期ははっきりしたことは分からぬのですけども、亀甲の占いはもちろん中国から到来したもの。例の甲骨文字などももちろん亀の甲羅を使っておるわけであります。これが一番最初に伝えられたのがやっぱり対馬・壱岐なんですね。それがだいたい、考古学の所見では、たぶん5世紀ぐらいだろうといわれております。それまでも占いはやっていたんですが、これはシカの肩胛骨や動物の骨を焼いてやっていたんです。しかし、亀の甲の占いはもうちょっと進歩した卜術法なのです。そういう占いを中国から受け入れた対馬の豪族たちを大和の朝廷が注目をいたしまして、これを宮廷に迎え入れたのは多分6世紀も終わり頃、7世紀に入っていたかもしれません。しかしこれは部民制の時代で、対馬の豪族たちは大和にやってくるのに船でやってきました。そしてこの備前の三野の地で一服する、休養をとるわけです。その世話係をしたのが津島部であります。そういうふうに考えていいんじゃないかと思いますね。そういうことが考えられるといいますと、ちょうどこの6世紀の後半というものは歛明媛のころです。白猪屯倉や児島屯倉というのが吉備におかれたところです。わざわざ蘇我の大臣が吉備へ出かけて屯倉をおいたという記事が『日本書紀』に出ております。つまり児島屯倉などは港としての機能が重要視された屯倉でありますから対馬の豪族が大和にやってくるときはそういう港も利用されたであろう。そういうことも考えられると思います。

地面の下の遺跡も大事でありますが、地名も大変大事であります。地名は時代の重なった歴

史が凝縮して我々の周辺に残っているわけですね。この地名を改変するという話が1960年代にありました。郵便物の配達を簡便にするために住所の表示を変える、それで日本全国のそれまであった地名がかなり無くなりました。しかし、反対運動なども起こりまして、自治省はやっぱり地名は大事にしなさいということで住所表示改変の動きは止まりました。そういうことを思いますことと、津島の遺跡に関してはやはり6世紀以降も注目される遺跡であるということを最後に申し上げて雑ばくな話を終わらせていただきます。ありがとうございました。



1999年1月29日 印刷
1999年1月29日 発行

岡山大学構内遺跡調査研究年報15 1997年度

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市津島中3丁目1番1号
(086)251-7290
印 刷 西日本法規出版株式会社
岡山市高柳西町1-23
(086)255-2181(代)